目　　次

はじめに ･･･ 2
ファカルティ・ディベロップメント委員会委員長　　中村 年春

「第１回全学ＦＤ・全学プロジェクトＡＬ委員会共同主催研究会」報告 ･････････････ 3
演　題：「アクションリサーチによる大教室における参加型授業」
ケーススタディ（ビデオライブ）を見るために・・・
講演者：内山 研一 教授（本学経営学部経営学科）
日　時：2017年11月1日（水）16:30～18:30
場　所：東松山校舎管理棟大会議室／板橋校舎 2 号館 2-0220 大会議室

「第２回全学ＦＤ研究会」報告 ･･･ 32
演　題:「東松島フレンドシップＰＢＬ事例報告会」
講　師：第1部　中野 泰彦 事務長（地域連携センター事務室）
第2部　齋藤 博准 教授、鶴田 佳史 准教授、飯塚 裕介 講師
（環境創造学部環境創造学科）
日　時：2018年1月16日（金）17:00～19:00
場　所：板橋校舎 1 号館 1-0312 情報教室／東松山校舎 631 階段教室

2016年度「卒業生アンケート」報告 ･･･ 62

2016・2017年度各学部・学科ＦＤ活動報告 ･････････････････････････････････ 96

はじめに

全学FD委員会
委員長　中村 年春

2017年度の全学FD委員会は、授業評価と教育改善を中心に活動を展開しました。

まず、授業評価活動では、C-learning システム（Web 方式）を導入して、後期に「学生による授業評価アンケート」を実施しました。Web 方式を採用する利点は以下の通りです。

① 学生による授業評価アンケートの結果をリアルタイムで集計できる。

② 授業評価アンケートの結果に対する教員コメントもリアルタイムで学生へフィードバックできる。

③ 授業を短縮する必要がなく、期間中なら時間、場所の制約を受けずに回答できる。

全学FD委員会では、それぞれの学部・学科が独自の視点から授業評価アンケートの結果を分析し、全学FD活動の活性化に寄与することに大きな意義があると考えています。各学部・学科から寄せられた報告書の内容をみると、前年度との比較や全学平均値との比較を意識した分析の記述が定着してきたように思われます。

しかし、本年度は Web 方式に切り替えたために、アンケートへの回答率が例年より大幅に下がってしまいました。今後は Web 方式での回答率を高め、各学部・学科の授業改善に繋がる取組みがより一層活発になるよう、工夫していきたいと考えています。詳しくは、授業評価報告書『学生による授業評価と大学教育』（2017年度版）をご覧ください。

次に、全学的な教育改善活動では、2017年11月に①全学プロジェクト予算委員会AL部会との共催で「アクション・リサーチによる大教室における参加型授業」（講師：経営学部教授　内山研一氏）、2018年1月に②地域連携センターの協力を得て、全学FD委員会が主催し「東松島フレンドシップ PBL 事例報告会」をそれぞれ開催しました。

①は、ビデオライブによる参加型授業のケーススタディとして、学生がそれぞれの課題について、グループで検討を行い、発表して、その発表について討論を行いました。②は、東日本大震災の発生から現在に至る東松島市の復興および再建の状況、東松島市と本学との関わり、活動状況などのほか、本学の学生と教職員が一緒になってグループを形成し、東松島市の課題に対して、学内での事前研修、現地での調査・ヒアリングおよび研修を実施し、最後に東松島市関係者の前で課題解決に関する最終報告会を開催した PBL 授業を取り上げ、パネルディスカッションを行いました。両日とも熱心な参加者が多く見られ、これらのテーマに関する全学的な関心の高まりを窺い知ることができました。

最後に、例年通り2016年度に実施された「卒業生アンケート」の集計、分析を行いました（本報告書に掲載）。また、前年度より始めた大学院博士課程前期課程および修士課程の修了生を対象とした「大学院修了時アンケート」を、2017年度も実施しました。

教職員の皆様には、本報告書を是非ご覧いただき、本学の教育研究の質向上とその充実に役立ててくださるようお願い申し上げます。

以　上

第1回全学FD委員会・
全学プロジェクトAL委員会
共同主催研究会報告

「アクションリサーチによる大教室における参加型授業」

ケーススタディ（ビデオライブ）を見るために・・・

講　師：内山 研一 教授（本学経営学部経営学科）

日　時：2017 年 11 月 1 日（水） 16:30～18:30

場　所：東松山校舎管理棟大会議室
　　板橋校舎２号館 2-220 大会議室

2017年度全学FD委員会研究会
第１回全学FD委員会・全学プロジェクト予算委員会AL部会
協働主催研究会

「アクション・リサーチによる大教室における参加型授業」
― 世代間の暗黙知の共有をめざして ―

講演者：内山 研一 先生（本学経営学部経営学科教授）

日　時：2017 年 11 月 1 日（水） 15：30～17：30

会　場：東松山校舎　管理棟 3 階大会議室
【遠隔】 板橋校舎　2 号館 2－0220 大会議室

－プログラム－
◇開会挨拶（15:30～15:35）　全学ＦＤ委員会委員長　中村 年春
第一部
◇講 演（15:35～16:20）
◇休 憩（16:20～16:30）
第二部
◇ビデオライブによる参加型授業ケーススタディ（16:30～17:15）
（1）歩きスマホの問題
（2）晩婚化の問題
（3）トランプ氏大統領選のフェイク・ニュース
（4）学生インタビュー
◇質疑応答（17:15～17:25）
◇閉会挨拶（17:25～17:30）　全学プロジェクト予算委員会委員長　青木 幹喜

【内山 研一 先生　授業公開日】
①11 月 15 日（水）3 限　東松山校舎 6 号館 642 教室
②11 月 22 日（水）3 限　東松山校舎 6 号館 642 教室

第１回 FD研究会（前半）

昨年に引き続き、全学FD委員会と全学プロジェクト予算委員会AL部会の共同研究会は、全学プロジェクト予算事業（公募採択事業）で始めた「教員による授業公開」にもご協力いただいた経営学部・内山研一教授による「アクション・リサーチによる大教室における参加型授業」と題して講演を行いました。
第1部は、内山研一教授による第2部「ビデオライブによる参加型授業ケーススタディ」の前説として講演されました。

内山　今日は本当に大きな反響がありまして、後でお話しようと思うのですが、終身雇用について、発表したグループがいたのです。
私は終身雇用ってプラスのものと思って、いまは終身雇用がどんどん崩れていると、そう思っていた。ところが学生さんは「終身雇用だから、今の世の中が悪いんだ。」と。後でちゃんと説明しますが、勝手にいうと、色々な新聞とか見て、いま上司に誘われて飲み会に行かない若い社員を「けしからん」と言っていると。なぜ「けしからん」と言われるのか。「そりゃ終身雇用が悪いぞ」と。繋げているんです。なぜかって言うと、上司に逆らえないような状態にあるからじゃないかと。終身お世話になると思ったら、逆らえないじゃないですか？と言うわけです。僕らのようはサラリーマンで働いていた人は、どうせ上司なんて一年、二年経ったらいなくちゃうんだから、突っつかれたって大丈夫だと思うのですけど、学生はそう思わないらしいですよ。ということは、ある意味では終身雇用を、そういうプレッシャーに思っているんです。他の学生のコメントしてもらった人たち、みんなそうでした。終身雇用だなんて「ヤダ」、「ウザったい」、全員が言っていました。これはすごいギャップがあるなと、本当に学生のフレッシュな本音ですね、それが聞けるのです。
　だから我々は学ぶという事は、我々が学んでいるのです。我々は給料もらって学んでいるのだっていつも学生に言っているのです。そういう具有性が大事、だから私は、いつも思ってもいない発見があるのです。次ですね。
　さっき言ったように、内観が非常に実証的になっちゃうと逆に面白くないのです。内観は暗黙知の方で、むしろそれを構えに変えてく、私がある意味、方法論で言おうとしているのは、暗黙知だけだったらダメです。暗黙知を一つの構えにまで持っていく、何か方法論が必要だろうと、それをこれから説明します。次いきましょう。

　私のさっき言った、アクティブラーニングって、どういうことから始まったのかなって思うと、参加型ってことだったのです。私は参加って非常に大事なことだと思っていました。ただ、参加型、参加型って色々言うのですけど、英語でアテンドとパーティシペーションって2つあります。
アテンドとは、ただいるだけですよ。パーティシペーションって、そこに参加していると、その違いですね。
で、どのように違うのかというと、アテンドはオールって考え方です。
　モノ的な、要するにモノの個別にある要素が集まって全部になると。そういう発想の元でアテンドってあるわけですよ。だからアテンドした場合ですね、1人いなくなっても、2人いなくなっても、関係ないし、3人いなくなっても関係ない。逆に増えても関係ない、そういうのがアテンドです。アテンドは、ただそこにいるということです。
　ところが、このパーティシペーションっていうのはちょっと違いまして、パーティシペーションはパートを担っているのですよ。だから1人欠けるとちょっと困るわけです。今日も、グループプレゼンテーションをやっ

ているわけですが、5，6人でやるのですけど。これ2人いなくなるとちょっとね。5人の作業を2人か3人でやれば、ちょっと難しいですよ。それはなぜか、パートになっているからです。パーティシペートとは、その全体の場なり、その発表のパートを担っている、一人ひとりが担っている。いなくなるとちょっと困るのです。だからそれ、オールじゃなくてホールなのですね。ホールとしてのパートなのです。これ非常に大事で、そうするとね、わたしの授業だけ先に言っちゃいますと、一番問題はなかなか出席を確保できないのです。私、最初から出席しないでいいよ、出席取りません、とは言ってないです。その代わり自分でちゃんとやってよね、と言っても時々、皆さん自分の発表が終わると、その場でもう自分の点がついてしまうので、次から来るのはなかなか足が重くなるのですね。このあたりがこのパーティシペーションの難しいところです。これ、先に言っておきます。

パーティシペーションって、具体的に何だろうと、こういう授業の場で考えた時、僕は音楽の合奏に似ていると思うのです。要するにみんながみんな、それぞれのパートを持って、みんなで合奏しあう。一つの音楽を演奏する。それを授業でやる。要するに授業の始めで演奏しだして、終わりで終わると。その中で感動もある、そういう授業が、一つの私の言っている参加型授業です。そうすると、合奏するためには何が必要かっていうと、私音楽もやっていないので、そういう事を言うのは想像ですけど。要するに、これは面白いんです。音はサウンズですよね。これ、音はサウンズですけど、空間の中に鳴っている、その物理的な音って、モノですよ。これをいくら聞いてもね、実は音楽は進みません。これは当たり前のことで。
音楽っていうものは、いま鳴っている音を聞くと同時に、ちょっと前の音を聞いとかなければないのです。それと同時に、ちょっと先に予期される音、これを全部聞いて、全体として音楽として演奏しないと、いまの聞いている音だけを聞いて演奏はできないです。そういう意味で音楽って非常に全体性のある、一つのやり方なのです。だから音楽は演奏すると同時に、聞かなきゃいけないのです。その鳴っている音を聞いて、その聞いているのをいまのただ鳴っているだけでなく、音楽として全体として聞いているっていう。
だからつまり、モノとコトっていう日本語があれば、モノとして音を聞くものじゃなくて、コトとして音楽を全体として聞かなければならない。だから、発想がモノ的な発想じゃないんですね、音として聞いている、コトとして聞いている。それを英語に直すとアクチャリティーって、私がこれから説明しますけど、アクチャリティーを共有していこうということです。

つまり、リアリティーはある意味では非常に、こうモノ的な現実であって、アクチャリティーっていうのは、いま言ったような、そういう音楽を共有するような現実です。こういうものを、ですから全面に出して、議論しないと、授業の場全体が、そういうふうに共有できないとか、さっき言ったパーティシペーションにならないということです。

具体的にどういうことかと言いますと、特殊な例になってしまいますが、離人症っていう病気があるのです。これスキスフレーニって書いてあるのですが、実はそんな性格じゃないので、この中の離人症っていう症状ありましてね、なったことない人は中々わかんないんですけど、皆がなったら大変なで、ちょっと難しいですけどね。

青木先生、ボトル出して。これ、ボトルって、誰でもわかりますよね。だってこの安全値、色もわかるし、重さもわかる、これ全部わかる、これ離人症の人もわかります。当然モノとしての現実は全てわかっているのです。特に離人症の人、スキスフレーミングって人は頭いい人が多いので、インテリジェンスが高いので、全てわかっているのです。

何が分かんなくなっちゃうのでしょうね。実は同じ現実でも、コト的な現実、つまりこれに対する実感。こ

れがなくなるのです。そうは言っても健康な人は分からいでしょう。でも実際に、この離人症の人達は、非常にモノとしての現実は非常にわかります。だけど、実感というか、これ（ボトル）のコトですね、つまりこれ（ボトル）がどういう意味までいかない、意味の前の話ですから。これに対する自分の実感ですよ。これ青木先生が触っていたから大丈夫かなって、そういう実感がないのです。モノとしてはわかるのです。だからそういう実感が消えちゃうということです。だからこれ怖いです、だからこのボトルだけなら、返せば済みますが、世の中全体がそうなった時に、これかなり重症です。こういう方が実際にいるのです。

私が何を説明しようかというと、つまり現実感がなくなるっていっても、リアリティーとアクチャリティーがあると。つまり、リアリティーとしての現実がちゃんと分かっていても、実はそういう意味でアクチャリティーとしての現実、実感がなくなっちゃう病気があるということを言いたいです。

なんか最近の若い人の歌で、「君といた空の色は忘れたけど、君といた事は覚えている。」って、なんかかっこいい曲があるのです。で、君といた空の色とは、まさにリアリティー、モノですよね。それはもう忘れていると、でも君といたコト、つまりアクチャリティーは覚えているよっていう、そういうカッコいい文句があるのでね。そう思ったら、うちのおばあちゃんも、今日の食べた朝の食事は忘れているのに、なんか昔の事はよく覚えてて、えらい昔の僕がした悪いことについて、怒られたりするわけですよ。そういうのはアクチャリティーです。つまり昔のそういう記憶とは、アクチャリティーとして残っているわけです。ただ、今日の朝、食べたご飯のモノとしての現実は忘れている。ですから現実というのも、いま言った2つのこれ、もちろん一般では混ざっています。混ざっていますけど、あえて学問として分析してく方法論としてこれ分けて考えると、これからの話がわかりやすいと思います。

元々、アクチャリティーとリアリティーの語源は、木村　敏先生という精神病理学の先生ですけど、この先生が言い出した話ですね、日本では。このアクチャリティーというのは、アクティオっていうラテン語から来ているんです。これアクションです、元々は、英語に直すと。アクション的な現実が、アクチャリティーです。もう一方のリアリティーは、これ有名です。レスっていうラテン語です。これモノですね。ここはもう少し議論すると、モノもコトも両方なんていうか、概念的に混じっている部分もありますけど。とりあえずこういうことです。

だから、リアリティーとアクチャリティーと、元々語源からしても違うので、非常に切迫したコト的な現実がアクチャリティーにはあって、一番冷静に客観的に見るような現実、主観的ではなく、これはリアリティーというふうな区別が、元々の言葉としてあります。

これはよく言うのですけど、例えば、時間と空間ってありますよね。「ああ、もうつまんないな、早くおわんないかな。」って思っている時間あるじゃないですか。それって、アクチャリティーですよ、時間は。そうでしょ、「早く終わんないかな」って。でも、彼女に会っているときは「もう帰っちゃうんですか」、それも時間でしょ。でも、それって時間なわけなのに、でもこれ時計で表しちゃうと、この2つの針の間の空間で時間を測っているじゃないですか。いまだって、何時ってそうでしょ、時計見たってこれ時間ですよね。これ、時間じゃなくて空間じゃないですか。だって時計の間のスペース、間の距離で測って、時間じゃないです、この時点で。

本当の時間っていうのは、コーヒーに角砂糖入れて、これが溶けるのをじっと待っているこの時間、こういう時代あったわけですよ、我々には。みんな、知らないでしょ角砂糖って。いま、こういう角砂糖もなくなっちゃうような嫌な時代じゃないですか。これITが悪いですよ、すべてね。私なんてIT大嫌いです。ITが悪い。そういう時代、せっかくいい時代であったでしょ、これが本当のアクチャリティーです。だからアクチャリティーは、回復しないといけないと思うのです。次は時間ですけど、空間でも同じことが言えるのです。

ヨーロッパなんか行くとですとね、よく自動車を狭いとことで、ぶつけながら入れている人がいます。これスキゾフレニーっていうか離人症の人は、車入れられないです。なぜなら離人症の人はブレーキ踏んじゃうタイミングがわからない。皆さん免許持っていますよね、そうすると車庫入れを教習所でやるじゃないですか。あの時にあと30センチ、20センチとか、リアルティとしては分かっていても、離人症の人は20センチという実感感覚がない。アクチャリティーがないからブレーキを踏めないのです。だから、ぶつかっちゃう。これも一緒です。

だから、そういうふうに距離でもアクチャルな距離、リアルな距離っていうのがあるわけです。いま介護とか何かと色々問題になっていますけど、近くにトイレがあるから大丈夫でしょって言っても、もう老人の方、足の悪い方、近くにあるといっても、アクチャリティーとしたら、インドにあるくらい遠いかもしれないですよ。でも、若い人から見れば、「すぐそこじゃないか」って言う。そういうアクチャリティーとリアリティーって、そういうところに使われるわけです。同じ距離でもアクチャリティーとリアリティーって、こう違ってくる。それが分からなくなっちゃうのが、離人症なのです。

あまりそればっかり長く話していてもしょうがないので、一応そういう事をベースにしますと、先程の経験の力、どうやって構えを作るかっていうことの、一つのヒントみたいのが出てくるのです。

一つは、今アコモデーションという概念が重要なのです。合意っていうのです、普通、合意っていうのはコンセンサスメイキングっていいます。ところが、コンセンサスっていうのは非常に特殊な場合なのです。つまり非常にロジカルというか、イエスかノーとか白黒はっきりしてっていうか、要するに、ここからここが、この絵でいくと、ダブルの世界観なのですけど、2人の人の世界観みたら、当然ここからここまではコンセンサスでいうと、こっちはできない、線がはっきりしているじゃないですか。そういうのをコンセンサス。当然それは主張ですよ、世の中、社会生活送ってく上でコンセンサスは。

私も1回行かせても頂きましたけど、海外でアパート借りる時は50枚くらい契約書がありまして、その一枚一枚に全部イエスかノーかで書くのです。もう、はい、OK、OKって全部サインさせられて、50回サインさせられる。ハンコをバーって押していくわけじゃなくて、サインですから。

何故するかっていうと、コンセンサスです。あなたはここ、「いいですね、いいですね」って、全部聞くわけです。ショックです。なんでこんなに面倒くさいことを。それを、やられるわけです。これはもう欧米はほとんどです。

それはコンセンサスを求めている。つまり、論理的な合意です。白か黒か、イエスかノーかはっきりしろ、というわけです。これはアクチャリティーベースなのです、リアリティーベーション。

ところが、もう一つの合意の方法がアコモデーション。アコモデーションは何かというと、これを辞書で引くと同居って意味です、同居すること。で、何が同居するかというと、違った世界観が同居する。この世界観がいくつもあります、個人の世界観、絶対違うから。これが同居している状態です、アコモデーション。『え、そんな事できるの』って、できるのですよ。

これは、例えば日本の場合ですね。青木先生なんか飲みに行くのが好きだから、新橋とか行くでしょ。すると大体のこのおじさんたちは、アコモデーションです。ビール2，3本って言いますよね。これ、フランスで言ってみたら、ぶん殴られます。2本と3本どっちだ。必ず言われますから。僕らは平気でビール2,3本って言います。そうすると従業員は必ず3本もってきますから。それはそうですよね、売上が上がるから。これがアコモデーションです、暗黙知の共有なのです。

だってそうじゃないですか、ビール2,3本って言って、2本か3本かどっちって聞くほうがある意味日本ではおかしい。ところが、外国では聞かないとおかしい。この差です。何だろう、海外から帰ってきた人が日

本人は曖昧な文化だってね。特に最近、都知事でいるじゃないですか、あの方が英語で、見える化とかね、僕大反対でね。あれは暗黙知のない人。全部コンセンサスでしょ、見える化でしょ。

世の中そうじゃないのです。アクチャリティーの部分だったら、要するに現実、アクチャリティーとリアリティーって混在しているわけですから、その混在している部分を無視して全部可視化したら、そんなもの、ありえません。見える化できないですから世の中。ビール2,3本の世界あるわけです。

もう少し別な例で紹介します。このアコモデーションの例なのですが、私のアメリカの知り合いが、17年もアメリカに住んでいたら、頭アメリカンになっちゃいました。それでアコモデーションが分かんないって言うんです。分かんない、分かんないって。教えてよって言うから、「ああ、いいよ。」って。彼は日本人の奥さんと夫婦で行っているのです。この夫婦が、毎週喧嘩するのです、金曜日に。アメリカですから土日はもう絶対休みです。で、なにで喧嘩するかというと、奥さんの方は映画好き、旦那はテニス好き。で、面白いですよ、もう金曜日になるとね、車の中でもう明日テニスだってね、ダメよ、映画よって言うわけ、あしたテニスよ、映画、テニスよってもう車の中で大喧嘩になるわけ。金曜日に毎週やっているのです。アコモデーションってなんなのよということで、じゃあ今週、映画行ったら、来週はテニスって、そりゃ妥協、それはコンプロマイズ、妥協はアコモデーションではありません。では、午前中映画行って午後テニス。それもダメです。じゃあ、なんなの。難しいでしょ、これ難しいのです、だからアコモデーション考え出すと。
「みなさん、なんだと思いますか？」ここは、気付きの授業の面白いところです。ここは、なかなかコロンブスの卵です。

アコモデーションは何でしょうって言ったら、実は、私の家を考えたら、絶対喧嘩なんかしないのですよ。なぜ喧嘩にならないかっていったら、最初から一緒にいたいと思ってないから。休みに一緒にいたいと思わないから、「ああ、ご勝手にどうぞ、どこでもお買い物でも・・・」って。でしょ、一緒にいたいと思うから喧嘩するじゃないですか。この点々ってなんですか、要するに世界観違う者が同居するためには、一緒にいたいという思い、その思いが共有しているからそうやって喧嘩になるじゃないですか。だから、このアコモデーションって非常におもしろくて、この考え方が違っても、そのある違ったレベル。つまり、思いのレベルが共有するってことがすごく大事なんです。

例えば、他の例で言えば、姑と嫁さんが喧嘩になる。これ、しょっちゅう喧嘩になる。当たり前ですよ、世界観違うのですから。でもこれは、世界観違って喧嘩になっても同じ家に住んでいる、つまり同居しているアコモデーションしているってことは、なぜかっていったら、（私の家）内山家ってものをなんとか継続さしたいという思いだけは共有している。だから、そういう思いの共有のベースに乗っかれば、仮に世界観違っても同居できるよ、っていう事です。

実際、こういうことは起こっていますし、この方法論でやれば、私はもう、かれこれ20年、30年やっていますし、何回も外国も含めて、南アメリカでもやっていますし、これも黒人と白人と全部やったのです。もう全部できます。できるのですよ、ほんとに。ですから、いかにその思いを引き出して、その認識でぶつけるんじゃなくて、つまりリアリティーでぶつけたら必ず喧嘩になるのです。

だから日中問題もそうでしょ、韓国も。そんなもん歴史認識なんて合うわけないじゃないですか、。そんなもん研究したって何もなんないですよ。合わないのだから、認識とは人間って絶対合わない。
ところが、行動だったら合うのです。あの有名な国連の緒方さんが言いましたよ。「一緒に壺作らせなさいよ。認識が合わなくたって、壺ってアクションしたら仲良くなれるよ。」それはアクションすることによって、認識じゃないから、アコモデーションできるわけですよ。つまり、アクションがいかに大事かってことです。
だから、アクティブラーニングが大事なのです。そこです。せっかくそこ大事なのに、それまた分析で何かを持っていったら、また元に戻ってしまう。そうではなくて、そこは暗黙知を共有しながら構えを作っていく。

つまり、そのアクションの部分、思いの部分で共有するって事が非常に大事なのです。それが共有できていれば、世界観が違っても大丈夫なんです。ほんとに。成功例ばっかり言いましたけど、中国行ってこの話したら、すぐ帰って下さいって言われました。中国の方は、中々こういう話は難しいです。

これも有名なナレッジマネジメントの野中さんの正規モデルです。では、正規モデルって何かっていうと、これも非常に面白いのです。日本において知識が作られていくとき、イノベーションがいっぱい出てきます。イノベーションが、どうやって出来てくるかっていうと、これはアメリカと全然違うって言っていっています。アメリカと違うのです。どこが違うかというと、要するに日本人は暗黙知を非常に大事にしているのです。その暗黙知の共有です。

このSECIって何を意味しているかというと、このEっていうのは、概念化ですね。Cっていうのは、組み合わせ。だから、ある概念化をして、ある概念で商品を概念化して、それを組み合わせによって作っていくと。

どんな組見合わせがいいかと研究していく、これは普通のやり方です。ただそこに、あるインタラクゼーション、Iという何か行為をしますと、そこから人間というのは学んでいるのです。

だからホンダならホンダで、何年も勤めてればホンダのやり方なり何なり、暗黙知で学んでいると、その学んでいることが共有されていることが大事なのです。そうしますと、この概念を出す時に、いちいち設計図、全部書かなくていいのです。さっき家借りる時には契約書100枚必要だと言ったでしょ。あれは不要なのです。日本は一枚で、甲乙問題あるときは協議すると一行書いてあれば。契約書じゃないって言われますけど、それなのです。

だからイノベーションする時も、いちいち全部に判して何百回も判する必要はないのです。そんなこともうわかっているでしょう。じゃあ、これでやる。だから、いまの神戸製鋼とか日産の問題が起きるのです。だから欧米の文化とどっちがいいかわからないのです。

だから、それは非常に良い面と悪い面があります。ただ、暗黙知の共有というのは、悪い面もありますけど、それだから切り捨てるってものでもなく、必ず良い面があるのです。このイノベーションするときは非常に大事になってくる。暗黙知の共有をして、それによって概念化して作っていく。このサイクルは野中さんが世界で非常に有名になった一つの事例なのです。

もう一つ付け加えときますと、これがどうしても分からないと、これは有名なマイクロソフトのCKOチーフナレッジオフィサーっていう、ケネディーという女の人ですけど、フランスでこの辺りのカンファレンスやった時に、僕がこれ説明したのです。終わってから僕のところに来て、「やっとわかりました、暗黙知の共有が。わたしずっと情報の共有だと思っていたのですよ。」って言うのです。欧米の人はこれ、情報の共有だと思っているのです、暗黙知の共有について。

なんで情報の共有が悪いかっていったら、彼女が言うには情報の共有って別に暗黙知の共有という意味で情報の共有じゃないんです。

つまり、欧米人っていうのは隠すのです、情報を。情報を隠してしまうから、それを出させるために共有化しようとすることです。全然意味違うでしょ。

だから野中さんが言っているのは暗黙知を共有して、そこでイノベーションの無駄を省きましょうよと、要するにビール2,3本で済むところを、いちいち噛む必要ないよっていうのが野中さんの考え方だけど、欧米でこれをやりますと、情報の共有、要するに、みんな情報出せよと。隠している情報を出せ、それで共有していることだって、そっちに考えちゃうわけです。

すごい誤解ですよ。それをやっとわかったと、僕も初めて気が付きました。ああ、そう考えているのか、と。

だから、日本とアメリカなんて合うわけないよねという話です。だからそこまで考えて交渉しなきゃならないです。

次にこれでそろそろ終わりにします。これがさっきのミゾガメさんたちのモデルです、問題解決論。
私が提唱したいのは、いまのアクチャリティーをベースにしまして、次のモデルですけど、構えと自覚と覚悟、こういうモデルです。
これはPDSとちょっと似ているようなのですけど、全然違います。
どのように違うかっていうと、説明色々あるのですけど、例えばリスクと危機との違いを考えていただければいいのです。
リスク管理っていうのは何かというと、いまもこの我々の周りにも非常にリスクがあるし、我々自身もリスク被って、これリスクどうやって対応していくかっていったら、リスク管理というのは、リスクは何かと言うと、東日本大震災の時に有名になりましたけど、想定外って言葉が出てきましたよね。
想定できるからリスクなのですよ。なぜならば、リスクは保険がかけられているからです。リスクは全部保険と関係している。リスクをちゃんと計量して、保険をかける。それで、堤防を作る。これがリスク管理です。
ところが危機というのは、実は想定外でしょ。想定できなかったら、どうやってリスク説明しますか。これ、できないじゃないですか。その時に構えが出てくるのです。
東日本大震災のとき本が出まして、玄侑さんという福島の僧侶でしたけど、お寺の方が日本は正義じゃなくて、覚悟だぞ、という本を出したのです。
あの頃、正義だ、正義だって、正義流行りでしたよ、日本の出版界は。
その時そうじゃないと、日本は覚悟なのだと。東日本大震災見てみろと、正義なんかじゃ何も回復しないだろうと、覚悟だって。そこで、だから、僕はここで覚悟って入れたのです。
つまりこれは、アクチャリティーのベースで考えたら、このサイクルというのは、プランクリスではないです。まずそういう意味では、危機のときはその準備ができない。準備は英語で言うとプリペアレーション。プリペアレーションではないです。これ英語にしたらダメです。レディネスなのです。

これレディネスは非常に大事な概念で、私が留学したときにこの方法論を作った先生がいますけど、レディネスというのは、構えとか姿勢です、剣術でいえば構えです。そういう構えなのです。
これは準備とは違いますから、例えば東日本大震災でいったら、堤防何メーターにしなさいというのは、これは準備です。レディネスにはない準備です。それは過去のいろんな震災の分析から出てくるものです。
これはさっきの内観で言えば、分析です。分析をした結果、こういう堤防にしなさい、準備をしましょう、リスクですね、保険かけて。
あれはなぜ、なぜ言い伝えられるかといったら、構えです。そういう構えで逃げろと。準備じゃないのです、何かあったら、どうする。別々で逃げるのだぞと。お母さん探しに行っちゃいけないよ、子供を探しに行っちゃいけないよ。まず自分が逃げなさい。
それ、構えでしょ。これが大事なんじゃないのですか、やっぱり。
だからこの授業でも、決して仮設的なそういう発表といっても、さっきの話ではなくて、自分の構えが大事なのです。構えって何かと言ったら、姿勢です。ということは、このプレゼンをする姿勢が大事なのです。
姿勢なり話し方なり、そういうことが非常に重要になってくる。
つまり、コンテンツをあーだ、こーだと、ごちょごちょと言うよりも、まずプレゼンの姿勢から、教えるということです。

それで次に自覚に移る。自覚というのは何かと言ったら、そのアクションにおいて自分の気付きです。そこで気付き、それが具有性ではないといけない部分です。
最初から計画されていたものではいけない。白熱教師で非常に有名になったマイケル・サンデルというハーバード大学の先生。大教室でみんなを指しながらですね、あーだ、こーだって、こうやって指して、非常にリーダーシップがある教師で、でも早い話落とし所は決まっているのです。
全部落とし所が決まっている。これ設計主義。つまり授業の中で落とし所が決まっていたら、具有性の中で発見なんか何もないです。
そう言っちゃサンデルさんには悪いけど、僕の考え方です。だから、そういう意味では、自覚というのは気付きなのです。
構えがあって、やっと気付きが起こって、そしたら覚悟というのは、実は言葉を変えれば、自信なのです。
そうすると自信がつくのですよ。仮説検証しても自信は一個もつかないです。真実がわかったところで、「なんで、私（俺）とは関係ないよねと、とは。」真実分かったところで、貧乏人が金持ちになるわけでもないので。真実は真実、真実の喜びとか普通の学生には嬉しくも何ともないです。
何が大事かと言うと、その自信。大東の学生に20年近く教えていて、一番大事なのは、自信だと思います。
最初に言ったでしょ。これはコンペジティブです。
要するに、競争優位が何かって大東の学生の競争優位ったら、プレゼンテーション能力、これで自信をつけること。これが、僕はこれからの大東のやることだと思います。
難しい勉強をあんまり教えたくない。そう言っちゃうと失礼だけど、それは他のところに任せておいてもいいです。
難しいこと、ある程度はやってくださいよ。微分積分は、そんなに難しいことではないかもしれませんけど、シンユラリティーが何かとか、特異点とか、僕でも分からないですよ。
そういう難しいことは、置いといて、むしろ、この構えと自覚と覚悟で、自信をつけてほしい。この自信が、必ず社会に出てから、この自信が活かされるのです。
自信がなかったら、何も出来ません。だから僕は、そういう意味では、このプレゼンテーションの授業、非常に大事だと思います。
皆さんが、自信をつけていただく。それがただのおべっかでなく、先生が授業評価あるから、「すごいね、すごいね」って褒めているでは、あなた達は何も本当のことかと受け取らないです。ほんとに自分がプレゼンをして、その実感がわき、それでみんなに褒められて、次の第二部でやりますけど、その時みんなからほんとに嬉しいと褒めていただいた。
「わたし小学校から学校で先生に褒めて貰ったのは初めてです。」言う人がいっぱいいるわけですから、いや、ほんとにいるのですよ。
それぐらい関係ないのです、プレゼンの能力とは。そういう意味で、すごく大東の学生に大事な自信をつけてください、ということです。
このサイクルが回るといいですね、っていうことです。

あとは余談ですが。
プレゼンの役割ですけど、そういう意味ではプレゼンって、普通、あのスティーブジョブズ、ああいう人がね、ガーガーやるでしょ。アリーナにおけるリベート、ガンガン自己主張。あんなのは日本のプレゼンじゃないし、日本のプレゼンは思いの共有なのです。

だから「ハイ手を上げてください」、だれも手を上げないでしょう。いいのです、思いの共有だもの、プレゼンは。
何で手を上げなきゃいけないのですか、だから僕はさっき説明した、17年間いるアメリカの先生、大学の先生、サンディエゴ大学の先生なのですけど、時々遊びに来て、うちのゼミやるんですけど。
その時、学生を向こうから連れてきたのです。合同でやって、なんで日本の学生は手を上げないんだって。冗談じゃない、日本のやつは手を上げないのがいいのだと。ちゃんと思いの共有ができているだろう、と。
ワーワー手を上げて、なに言ってみたら、下らないことしか言わないじゃないか。10秒と黙っていたら、彼女と一緒にいてもだめなの、アメリカ社会は。だから手を上げているだけでしょ、自己主張強すぎ、アメリカ。
もうちょっと、やっぱり場における思いの共有、これを大事にしたい。だから手なんて上げる必要ないです、そういうプレゼンが大事です。
　そういういま言ったような事をまとめますと、教育って何だろうね、ってとこが大事なのです。教育のトランスフォーメーションって、何を何に変えるのを教育なのか。
だからさっきから言っているように、決まった事を教えるのが教育だって、これも一理あります。知識を教えなきゃいけない、これあるけど、それとは違ってどうしたらいいのかなっていうのが、いまこれなのです。
設計主義とは、必ずアウトプットが先に決まっているのです。アウトプット決まっていて、それを手段としてどうやって教えていくか。これ一つの教育のやり方ですから、これはこれでいいと思います。
ただ大学というのは、これだけじゃいけないのです。やっぱりさっき言ったように、みんなの思いが逆にあって、その思いがそのプロセスの中で色々築かれている。
これ、オートコンシスって英語ありますけど、ちょっと前に流行りましたけど、これ自己生産性っていいます。要するに、自分が自分を作っていく。オートオーエーティックな、設計主義じゃない、要するに、アウトプットが分からないけれど、分からないけれど、ある思いを共有していくことによって、一つのセルスコンファーム、コンファームでしょ。要するに自信につながっていく、そういうやり方があるのです。
僕はどっちかっていったら、教育というのは、そっちの方をベースにしてやるべきだと思うし、もうわかっていることを教えているのだったら、何も、そういう「AIにどうぞ」っていう感じです。
以上で終わります。

司会　内山先生ありがとうございました。では、休憩後、第 2 部に移らせていただきます。

資料

２０１７（平成２９）年度
第１回全学 FD委員会•全学プロジェクト AL予算委員会
共同主催研究会

「アクションリサーチによる大教室における参加型授業」
ケーススタディ（ビデオライブ）を見るために・・・

2017 年 11 月 1 日

内山 研一

＜＜ガイドライン＞＞

・全体として見てもらいたい点
画面の中に❤マーク（アコモポイント）が出てくるが、これが全体の話（story）のプロット（転換点）である。
このプロットが、場においてどう繋がり、どのようにアコモデーション（思いをベースにした異なった世界観の同居）にもっていけるかのプロセスとその結果としての自信（self confirmation）がポイントである。

A）歩きスマホの問題

B）晩婚化の問題

C）トランプ氏大統領選、フェイクニュース

D）学生インタビュー

A）　歩きスマホ・・・多様な議論が触発され、それが社会的ラーニングに繋がっていくプロセス

① 対面で出席をとる：アテンドでなく、参加の始まりとして

② グラフでの説明でなく、体験談（思い）に焦点を置く

③ as something：コトとしてどう思うかを幾つか出す・・・

④ 学生のコメント：発表の仕方（構え／姿勢）から入り、次にコンテンツのコメント。＜いま・ここ＞への没入

⑤ 社会人のコメント：会社のメールが"システム"になっている ❤
新しい as something の気づき

⑥ 討論：社会人の側からの気づき
学生とのアコモデーション（常識の再構築につながるのか）❤

⑦ 発表者のラストコメント：学生の学びとコンファメーション

⑧ 先生（ファシリテータ）の評価：評価をすることもアコモのプロセス ❤

B）　晩婚化・・・社会人のコメントにより学生の「常識」が揺さぶられ、初めに思っていた問題が本当はどういう問題だったのか自覚できた

① as something：このトピックにおいてコトとしてどう思うかを幾つか出す。

② as someone：女性の立場から見て、どう思うかを出してみる。

③ 学生のコメント：紙をほとんど見ないで発表できた。このことによってプレゼンが話しコトバになって聞きやすかった。
（アイコンタクト、話のメリハリ）

④ 社会人のコメント：社会人からアクチュアルなコメントが出された。
社会人 A：金を十分持っている男でも結婚願望はない。❤
社会人 B：フランスでは結婚と未婚のあいだがある。❤
社会人 C：結婚は何度もしてもよい。❤

⑤ 討議：これらの社会人のコメントから、学生の常識が揺さぶられ、トピックが「晩婚化の問題」から「結婚するとはどういうコトか」という問題に変化した。

⑥ 発表者のリフレクション：学生の結婚に対する見方・考え方が変わってきた。❤

C）　アメリカ大統領選・・・

マスコミの予想に反してトランプ氏が勝利したことから、情報を鵜呑みにしないという話が始まってテーマがフェイクニュースやポスト真実まで深耕できた。社会人との対話による学生の自信やセルフコンファメーションが映像からわかる。

① 初めの問題意識：情報を鵜呑みにしないこと。

② 学生のコメント：他の学生もこのテーマにアコモしている。❤

③ 社会人のコメント：社会に出ると、「お客の言うことを鵜呑みにしない」という点で似たところがある。（社会人の当事者としてのコメントが目立った）

④ 討論：情報が信用できないなら、その情報はどこから調べたの（笑）❤❤
学生 A「自分で調べました」
（つまり、元の情報に当たり、自分で解釈したということ）

⑤ 発表後のリフレクション：発表者の学習が大きかった。
「ほめてもらえてうれしかった」。
自分の提示したトピックが議論され、対話したことで、自信（self confirmation）がついた。それが映像から読み取れた。❤

第１回 FD研究会（後半）

当日はビデオ放映をしながら、内山先生が解説していたため、文書のみだとなかなかご理解いただけない部分がありますことをお詫びいたします。

内山　実際のビデオを3種類見ていただいて、それでＱ＆Ａに入りたいと思います。ビデオが15分ぐらいで、プレゼン3つとインタビュー映像を1つ映します。
最初に（A）歩きスマホのグループプレゼン。その後、（B）晩婚化の問題。それから（C）トランプ氏大統領のフェイクニュース。この3つについての学生インタビュー映像です。インタビューとして構えて行ったのではなく、帰りがけた学生にビデオの撮影隊が近づき、何の仕掛けもしていないので、突撃インタビュー風になっています。そういう感じのインタビューです。

全体の見方ですけど、言った理論が直接結びついているかどうかはちょっと難しいですけが、放映中ハートマークが出てきます。ハートマークがピヨピヨって出てくると、それはアコモデーションしたときのレベルです。
みんながなんかワーって、ああいいねっていう感じのアコモデーションされたときは、ハートのマークがピヨピヨ出ますので、そこが一つのプロットというか、筋立てになって、それがずっと授業中で繋がってきて、最後に一つのストーリーの中の結論みたいなものが出てくるのかなっていうことです。それはA、B、Cにおいて同じパターンではないので。次のページから書いてあります。

Aの歩きスマホの場合、社会人が4人ぐらい登場します。社会人のコメントを入れることによって、そこで多様な議論が触発され、社会的ラーニングっていう、私が言っている学生と社会人の間でのアコモデーションみたいなですね、そういう社会的ラーニングが繋がっていく、そういうところを見てほしいですね。
Bの晩婚化はですね、結婚というのは非常に面白く、社会人の方がいろいろ変なことを言いまして、学生さんの常識が揺さぶられて、どうしていいかわからなくなっちゃうみたいな、そこが面白いのです。ただ、最終的にはどういうふうにつながっていくかというと、常識が揺さぶられながらも学生が学んでいきます。
学んでいった結果が何で表れるかというと、実はトピックが変わるのです。要するに、当初、晩婚化は問題だと思っていたのが、そうじゃなくて、議論によって結婚するってどういうことなのだろうって別な問題にシフトします。これが非常に大事なところなのですね。このラーニングによってこれが動いたっていう、その視点が動くことが非常に大事です。そこを見ていただければと思います。
C のアメリカ大統領。これはフェイクニュースとかよく言われていますけど、これを提示した学生さんたちが、今のちょっとニュースがあてにならないなと。あれではずっと、もう一人の候補のヒラリー・クリントン氏が勝つとずっと思っていたわけじゃないですか。ところがトランプ氏が勝ったと。そこに疑問をまずは持っているわけですよ。要するにあの、それでフェイクニュースの話にどんどん移っていって。やっぱりそういうことは社会でも実際起こっているし、社会人との対話の中で、そういう色んなことを学びながら、いや、僕らの提案したものでよかったのだって。かなり彼らが自信をセルフコンフォーメントできたっていう、そのところを見ていただきたい。

Aグループの学生による発表

私たちが今回問題としたのは、歩きスマホを罰金にすべきか否かについてです。ナビなどや音楽を聴いたりするなど、多方面で使うことが多くなったと思います。その一方で危険なことがたくさんあります。そこで今回私たちはSNSではなく、スマートフォンの別な危険性に視点をおいてみました。まずは、歩きスマホの危険性です。

歩きスマホをすることにより、視野が極端に狭くなります。歩きスマホをする人の大半は、画面に集中しています。その結果、たとえ目の前に人がいたとしても気づかないということがあります。

次のグラフをご覧ください。平成22年から26年、25年までの4年間に、歩きスマホの事故で152人が救急搬送されています。次に、実際にあった事故について話します。

2016 年度の4月には、女性が歩きながらスマホをしていてボールにぶつかり、ブロック塀に顔をぶつけて重症するという事故も起きています。また、その1年前には、男性が歩きながらスマートフォンを使用していて、踏切に落ちて電車に引かれるなどという命に関わる事故が起きています。

罰金にするメリットとして、一人ひとりの意識が高まり、人との接触や溝に落ちることが減りました。しかしこれらの理由から本当に罰金にするべきなのでしょうか。罰金というのは刑罰であり、前科になるものですから、歩きスマホでいきなり罰金を課せられるのは行き過ぎではないでしょうか。初めて行くところにはナビがないと厳しいです。読書や歩きゲームなどは OK なのでしょうか。なにか操作していなくても、周囲を見ずに歩いている人はたくさんいます。そちらの対策はどうなっているのでしょうか。また、規制する側の負担も尋常ではないでしょう。通常の業務に支障が生まれてしまうのではないでしょうか。

歩きスマホという行為自体が危険性を有していて、好ましくないとは思うんですが、法律などで規制をしたからといって歩きスマホがなくなるとは思えません。駅のホーム、歩道、路地、いろいろな状況があるわけで、大人であればスマホを使っていい状況か否か、判断できるはずです。今では歩きスマホ防止に対するアプリがあります。このアプリをどのスマートフォンにもはじめから入れておくなど、まだまだやれることがあると思います。以上で発表を終わります。

【質疑応答・感想】

学生A　発表の仕方は、各スライドともほぼ3行以下くらいで、すごく見やすかったです。内容としては、自分は歩きスマホはしないのですけど、電車とかではよくするので、電車とかでも使っていると周りが見えなくなることが結構あるので、危険かなと思いました。

学生B　紙を見ならでも、ときどき前向いたりする人もいたので、全然よかったのではないかなって思います。発表の方、罰金にすると、ときどき歩きスマホちょっとしちゃうので困っちゃうなと思いました。以上です。

コメンテーター（社会人）A　みなさんの当事者としての実感みたいのもあったらよかったなと思います。それでずっとこのトーンで行っちゃうのかなと思ったら、最後の方、言ってくれたので僕はすごくよかったなと思って、そこだと思っちゃいました。判断できるはずです、って言いましたよね。罰金とかにしちゃうのではなく、スライドに出てないけど、みんながちゃんと使っていい場所かどうか判断すべきですよってことを、みんなが最後にピシって言ってくれたのがすごく納得だったし。僕も、僕自身もね、やっぱ使っちゃうこともあるので、特にほら知らないとこ行くと、どうしたってナビやなんかでね、時間もなかったりすると立ち止まらずに使っちゃったりするので。そういうときに判断する力っていうのがやっぱり問われているのだなと、よくわかりました。

コメンテーター（社会人）B　歩きスマホってそもそもなぜ起こると。責められていてなんで起こるのだろうみたいに考えられるだろうと思うのですけど、どう考えていますか。

発表学生　なんか、もう触っちゃう。触っちゃうかなって、勝手に。意識はしてない、無意識です。

コメンテーター（社会人）B　最後は判断して、そこ触らないように意識するっていうのが重要だっていう気づきをありがとうございました。

コメンテーター（社会人）C　私はですね、歩きスマホをする人ですね。なんで歩きスマホをするのか、しなければいけないのかっていうと、今の世の中よくないですよね。なんでもかんでもスマホで会社のメールとかバンバン来ちゃって、見ざるを得ないみたいな、そんな感じになるので。私個人的な思いとしては、罰金にしてほしい。歩きスマホしたら罰金取られちゃいますからね、上司に堂々と言いたいです、本当に。ただ、ゼロ、イチの議論。罰金にするかしないかっていうのは、さっき言った通り中間もあるかなと思っている。こういうケースでは、例えば駅のホームとか、運転中では罰金取りますよとか、そんなのはアリなのかなと感じました。以上です。

コメンテーター（社会人）D　大人になるとですね、歩きスマホをする理由っていうのは変わってくるのですね。僕らはモバイルで仕事をしている関係上、バンバンメールが来て、メールが来るとブルルルっと振動するような設定になっているのですよ。そうすると来たその瞬間にメールを見て、来た依頼の仕事内容についてはどれぐらい時間をかけて解決するのか、目算をまず立てなくちゃいけないので、そういう意味では、仕事のためにやっている、業務上やっているっていうことだから、あんまり悪の意識っていうのはないのですよね、はい。そういうところをちょっと、気づいたのと、あと実際そういうふうにやらすクライアント側っていうか、会社側っていう話もありましたけど、考える必要があるのかなというふうに思いました。

内山　特に、コメンテーターの方の話を聞いてどう思いました？

発表学生　歩きスマホはだめだけど、仕事とかでメール、上司からのメールとかで見なきゃいけなくて、やむを得ず歩きスマホをしなきゃいけないっていうこともあるっていうことを知りました。

内山　そうですよね、僕もそれ知りました。それが逆にエクスキューズになっている話もありましたね。やだっていう話も、両方それについての話があったと思います。

発表学生　お話聞くに、会社の要件がメールで来るから見なきゃいけないとかもあるけど、それはちょっと、メールって急ぎの用事じゃない、急ぎのも来ると思うんですけど、歩きスマホはやっぱだめだとは思うのですけど、別に電話して歩いてる分には何も言わないじゃないですか。なんで緊急の要件だったら電話の方が早く絶対出るし、いいじゃないかと思うんですけど、会社ってそういうふうにはなってないのですかね。

コメンテーター（社会人）D　緊急のときは、確かに電話多いです。ただメールでも緊急のものってあって、そういったものはちょっと自分で見ないと、なかなか判断できないのかというのが一点あります。

発表学生　普通の人は歩きながら見られるものなのですか。

コメンテーター（社会人）D　重要度によって気づいたら立ち止まっています。うわ、ヤバイっていう感じで。そういうときは、なかなか歩きながらはできないですね。

内山　多分ですね、お客さんから来たトラブルの場合もあるよね。それがどうかわかんないから見なきゃならないので。多分、仕事しているとそういう場面いっぱいあるっていうことですね。

発表学生　そうなるとやっぱり見て立ち止まる場合もあるじゃないですか。その場合は歩きスマホに含まれるのかっていうのがあるので、罰金のつながりでいうと、ちょっと歩いているときに出してみて立ち止まった場合は、罰金がとおるのかどうかっていう線引きが難しいと思うので、罰金は無理だと思います。

内山　わかりました。ありがとうございます。そういうことを含めて、発表者1人ずつ簡単にレスポンスして

ください。

発表学生 A　罰金にすると、やはり難しいのではないかなと。社会人の方は仕事のメールだったり、学生だと仕事ではないのですけど、ずっと若いうちからスマートフォンというものを手にしていることが多くて、自然と何かで使っている。例えばSNS見たりとか、動画見たりだとか、いろんなことで使う。自然と使っていることが多いので、歩きスマホを罰金にするとなると難しいのではないかなと、私自身は思います。

発表学生 B　部活動の連絡とか、すぐ見る習慣がついていて、仕事の連絡と同じように見なきゃいけないみたいな感じがあって、だからそういうのをちょっと先輩とか考えてほしいなと思いました。

発表学生 C　自分がスマホ、歩きスマホをしてしまうっていうのは、歩いている時になんかしたら、一石二鳥じゃないけど、無駄な、歩いているときにやれたら、ほかのことをやればその時間がもっとうまく使えるかっていうふうに、効率的な、そんな深くは考えていないんですけど、そういうところで使ってしまっています。

発表学生 D　さっきは自分の体験を話さなかったけど、自分の体験として一つあるのが、ホームで歩きスマホをしていて、ホームの前の黄色の線をいつの間にか超えていて、気づいたら電車が来ていて、危ないなって思ったことがありました。自分はさっきも言ったのですけど、場所に応じて罰金を取る形でもいいかなと思いました。

発表学生 E　私は東京駅をよく利用するのですけど、歩く歩道のときに、携帯をいじりながら歩いている人とかよくいて、朝の通勤の時間とか、すごく邪魔だなって実際思っているんですけど。でも自分も東京駅とかで、電車が京葉線を使うかもしれないということで、時間が微妙なときとかに、急いでどっちの電車が早いか見なきゃいけないときとか、やっぱり歩きながらスマホ使わないといけないので、どっちがいいのか。

内山　それをしてても、危険じゃなければいいのだけどね、そういうことだよね。必要としていると。僕はスマホ持っていないのでコメントできない。だから鈴木先生にしてもらってください。

鈴木先生　今の、ここの全体の議論よかったですよね。これをやんなきゃいけないのだなと思いました。これを社会全体で、みんなで議論する場があるといいと思いました。どの意見がいいとか悪いとかじゃなくて、やっぱりみんなでこうやって話し合っていくことで意識できるようになるしね。僕、さっきのびっくりだったけど、学生は無意識に触っちゃうのですよ。まさにそうなのですよ。でもね、ビジネスマンもそうですけど、着信しちゃうから触っちゃうのだよね。だからやっぱり触っちゃうのと、どういうふうに付き合っていくかっていうのを、こういう議論の中、みんなで考えていったら、すごくよくなるかどうかわからないけど、自分の意識が変わっていけるかなと思いました。すごくよかったなと思います。

内山　ありがとうございます。議論がすごくいい。いい提案をしてくれて、議論が湧き上がったっていう面ではもうすごく良いです。、なんだけど。ちょっと経験談が一般論だったんで残念。経験談がもし自分の経験談だったらなお良かったです。だけどこの議論を喚起してくれた点ではすごく良かった。どうもありがとうございました。

Bグループの学生による発表

今回のテーマは晩婚化を解消できるのかというテーマです。このテーマは私たちを含め、みなさんの将来にも関わってくる内容だと思うので、このテーマにしました。ではなぜ晩婚化傾向にあるのか、原因を私たちなりに考えてみました。

まず、一つ目の原因として女性の社会進出です。働く女性が増えたことで、結婚を意識する人が少なくなりました。結婚したくても、その先の育児とか出産を考えて、ためらう女性が増えたのではないかと思います。

二つ目は、趣味の多様化です。趣味にすごく没頭することで結婚への意識が低くなり、結婚よりも、趣味の方を大切にする人が増えたのではないかなと思います。

三つ目が、出会いの幅が広すぎるです。出会いの幅が広いから、自分の理想の結婚相手の条件が多くて、出会いがあるからこそ、その人に出会うまで結婚を考えない人がいるのではないかなと考えました。次に、男女の比較について説明してもらいます。

続いて、男女の結婚感の比較についても、晩婚化に影響があるのではないかと思って、比較してみました。私たちが思ったのは、男性が結婚をする決意みたいなのをする経済的な余裕ができてから、結婚したいと考える男性が多いのではないかなと思いました。女性が独身の自由な生活を乱したくない、育児とか家事とかそういうのに縛られるのではないかとか、趣味の時間が自分の思ったように取れなく、そういうのが影響するのではないかなと思いました。

次に、解消法を説明します。私たちが考えた解消法としては、若い世代の雇用支援をするとともに、一人ひとりがもっと恋愛に積極的になることが大切だと思っています。
女性は収入が安定した男性を好む方が多いと思うんですけど、女性も社会に進出するようになったいまは、そのような甘い考えを捨てて、男性ばっかりに頼るんじゃなくて、自分も経済を支えるようになればいいのかなと思いまして、男性も収入が安定するまで結婚しないっていうその固定観念をやめて、もっと積極的になればいいのかなと思います。次にまとめを発表します。

まとめについてですが、今は解消法について話したのですけれども、私たちは最近の人は昔より結婚に対する意識、興味や関心が失われていると思われます。このままでは解消は難しいと考えました。晩婚が決して悪いわけではないのですけども、将来のことも考えると、もっと一人ひとりが、結婚に対する意識を変えていくべきだと私たちは考えました。以上で発表は終わりです。

【質疑応答・感想】

内山　ありがとうございました。難しいっていうことだね。ちゃんと原稿を読まないでやってきて良かったじゃないですか。

学生　発表についてはみなさん、紙をあんまり見ずに前を向いて、声も出ていてよかったと思います。内容については、僕はあんまりそういうことを考えたことがなかったけど、聞けてよかったです。僕は男なので、男の目線でしか考えられなかったのですけど、女性の目線も入っていて、新しい発見があってよかったです。ありがとうございました。

内山　そうですね。女性の目線ね。ずいぶん違いましたね。

コメンテーター（社会人）A　発表の仕方は、声ハキハキしていてよかったと思います。内容に対してはですね、私、結構経済的な余裕があるのですけども、しばらく結婚はいいかなと思っている感じなのです

よ。世間は経済がやばいって言っていると思うのですけど、自分の周りの男性では、経済的に余裕を持っている男性っていっぱいいるのですね。そういった意味で、自分がプラスの立場にいると、どうしても自分がプラスの立場で、自分の趣味とかに走ってしまうので、私が考えたのは、マイナスかけるマイナスがプラスにできるように、お互いに共感できるところがないと結婚は難しいのかなと思いました。

コメンテーター（社会人）B　僕はまだ結婚していません。これから相手を探すという段階にいるのですけども。原因のところ、出会いの幅が広すぎるというところに関して、非常に共感をいたしました。やはり男性の方も出会いの幅が広すぎて、選ぼうとしてしまうということが、非常にいまの、SNSとかでも出会えてしまうので、非常に問題になるのかなと。また、僕、男性としてきいたのが、男性もけじめをつけるというか、この人に決めるという、そういうけじめをつけるような男らしい男性になれればと、僕は感じましたので、ぜひこれもちょっと、もう少し深掘りして研究されると面白いのかなと思いますので、引き続き頑張ってください。

内山　やっぱり出会いの広さって、さっきほど言っていたのだけど、やっぱり感じます？

発表学生　スマホが出た影響って、やっぱ簡単に人と知り合えてしまうので。

内山　それが大きい。うん、なるほどね。僕らのときなかったからね、ちょっと想像つかない。じゃ、こういうふうに行っていいですか。

コメンテーター（社会人）C　発表ありがとうございます。まずいいテーマを選びましたよね。そこが素晴らしいと思いました。勉強になると同時に反省しました、いろいろと。一番ハッとさせられたのは、さっきも言ったように、出会いの幅が広すぎていい人が見つからない、出会えないということをすごいハッとさせられて。てっきり私あの職場でいろんな若い人としゃべる機会ありますけども、出会いがない、ないってみんな言うのです。そもそも出会いがないのかと思ったら、幅が広すぎて、ありすぎてなかなか選べないっていうことなのですね。そこがちょっと、ああ、そうなんだって気づかされました。

コメンテーター（社会人）D　新婚ですとか言って。発表ありがとうございました。価値観っていうか、それは固定観念なんだっていうふうに、自分自身が認識しているっていうのがすごいなというふうに感じました。やっぱり育児とか家事とかするっていうのは、非常に苦行だというようなことなのですけど。私と内山先生はフランスにいた経験があるけど、フランスはもうちょっとゆるいのですね。パックスっていう制度があって、結婚しなくても社会保障の経済的なメリットが受けられ、教会で結婚するけど、戸籍上は結婚していませんよとかね。そういうふうな形で、する、しないという二つの選択肢ではなくて、もう少し真ん中の中庸みたいなところがあったのかなと思います。自分自身の最後の気づきですけれども、自分自身、結婚した後も、一応共働きでやっているんですけども、妻の方が例えばお皿を洗ったりとか、子供ができたら赤ちゃんを保育園に必ず送り迎えしなくちゃいけないとか、それが当たり前だと思ったことは一度もないんですね。それはやっぱり、自分自身も50％以上はやらなくてはいけないと思いますし、男性側からもきちんと歩み寄らないと、こういう問題っていうのはなかなか解消が難しいのじゃないのかなと、っていうふうに気づきました。

内山　いいね。結婚って、しないのとするのと中間っていうの、すごい。そういうのを僕知っていれば、そういうのでやりましたけど。すごい案ですね、中間っていうのがあるのだ。

コメンテーター（社会人）E　ふっと思ったのが、晩婚化は解消できるかっていうテーマにしていますよね。解消せねばならないという思いがみなさんの中にあったのかな。

内山　解消しようと思って、この発表をしたの？

発表学生　私たちの世代からもう意識を改革しないと感じ、これから解消しようと思って。

内山　その意気は感じられたね。だから今、どっちかというと女性の方が、男以上に一生懸命考えているような感じ。ちょっとあそこにね、何回か結婚についてはやった人いるのでね、ちょっと聞きたいんですよ、

飛び入りで。

オブザーバー（社会人）　はずみで結婚したけども、はずみで結婚して何も考えないと、何回も繰り返すことになり。でも何回も繰り返した方がいいかなっていうことも感じました。

内山　ちょっと考え方変わってくるね。君たち（発表学生）の考えも変わったかもしれないし、こっち（聴講者）の人たちもコメントあるかもしれない。

学生　結婚は1度きりっていうのが定番かなと思ったけど、何回もしている方から話きくと、いろんな経験をした方がいいのかなという。私たちまだ学生で若いですし、そういういろんな経験をしておいて、っていうのもいいのかなと思いまして。

内山　悪い影響を与えている。考え方変わっちゃった。1回きりかなっていうのが定番だったらしいよ。

学生　自由すぎる、出会いが広すぎるというのは、1人しかいないっていう拘束もありますけど、自由すぎるっていう、逆に拘束になっちゃっているのかなっていうのが現状かなって思いました。

発表学生A　結婚は自分も1回きりだと思っていたけど。思っていたけど、その話をきいて、何回でも。

内山　できないよ、結婚は。そんなに簡単に変わっちゃだめ。

発表学生B　自分たちが思ったよりも、評価が高くしていただいていたのでよかったです。これをきっかけに結婚の意識が変わればいいなと思います。

発表学生C　結婚と結婚しない間のやつがあるっていうのを初めて知ったので、それをしようと思わないけど、なんか・・・。

発表学生D　将来、一人で老後を過ごすのは嫌だと思うので、結婚した方がいいので、どんどん結婚に意識を向けて行きたいと思います。

内山　なんか、解消法が見つかったかもしれないね、もしからしたらね。解消法がないって言っていたけど。ありがとうございました。

Cグループの学生による発表

アメリカ合衆国の大統領選挙についてです。まずこのテーマを選んだ理由は、みなさんご存じの通り、アメリカの大統領選挙で優勢と思われていたヒラリー氏に大差をつけて、逆転してトランプ氏が大統領に当選しました。このニュースを見たとき、ほとんどの人がなぜトランプ氏が選ばれているのだろうと思ったと思います。私たちも同じで、調べたことは、ニュースではどこでもトランプ氏を批判していたのに、国民の半数以上がなぜ選ばれたのか、どうしてどこの報道機関もトランプ氏を支持したような報道をしていなかったのかについて気になったので、このテーマにしました。

またニュースでは、移民にインタビューしたものばかりで、批判するのは当たり前です。このようにトランプ氏の発言は、はっきり言い過ぎなところもありますが、アメリカ国民にとっての本心であると言えます。だからこそ選ばれたのではないでしょうか。

次に、ヒラリーさんの人気が下がった理由ですが、メール問題があります。このメール問題はニュースでさらっと流されていますが、実はかなり大きな問題だと言えます。そもそもヒラリーさんが、個人的なメールアカウントで秘密情報をやり取りしていたことですが、問題はメールの内容だけでなく、国務省とは違うサーバーを使ったことが、内容が漏えいする危険性がありました。秘密情報が外部に漏れる、最近どっかで聞いたようなことがある話だと思いませんか。その国は、いまだ大きな騒ぎになっています。もしもトランプ氏が同じようなことをしていたら、袋叩きになっていたことでしょう。ニュースではあまり問題視されていませんが、このことで国民から大きな信用を失いました。次に、なぜそのようなことを言わないかについて話してもらいたいと思います。

なぜそのようなことをニュースで報道しなかったのでしょうか。過激な思想のトランプ氏を大統領にしないためという目的もあると思いますが、それ以外に、自分の会社の信用を守るためというものがあったと思います。トランプ氏は今まで移民やイスラム教、女性蔑視発言をしており、様々なところにケンカを売ってきました。そのためトランプ氏を支持するということは、それらの発言を支持したということになり、会社の人気や信用を失うということになるからです。ヒラリーを支持した方が、大統領になろうがなるまいが、ダメージが小さいと言えるでしょう。その結果、ほとんど全てのメディアがトランプ氏を批判したと考えられます。

このことから私たちが気をつけないといけないと思ったのは、情報を鵜呑みにしないことです。ちょっとありきたりですけど、でも実際に各メディアが叩いたのに、トランプ氏が選ばれたということは、それだけ国民にとってはいいと思ったということです。やはりヒラリーさんだけじゃなくて、トランプ氏を支持する人の目からもちゃんと見た上で、判断することが大切なんじゃないかと思いました。以上で発表を終えます。ありがとうございました。

【質疑応答・感想】

内山　そうだね。だから正に君たちがここでやっていること自体が情報を鵜呑みにしないで、自分たちで考えて発表しているのでいいと思います。

学生A　僕も実際、ヒラリー氏の方が勝つと思っていて、結果を見たらトランプ氏が勝っていたので、やはりニュースとか見て、情報を鵜呑みにしないで、自分でしっかり調べるということが大切だと思いました。

学生B　あとメディアに取り上げられてないことって書いてあったのですけど、その情報はどこから引用してきたのかなって、ちょっと気になりました。以上です。

発表学生　自分で調べ、そこから読み取りました。例えばトランプさんの講演会があって、そこにはデモもあったじゃないですか。でもあれって、トランプさんの支持の人が過激じゃなくて、ヒラリーさん支持派の

人が起こしているわけで。なんかこう、そういった事実から読んだというものです。
内山　トランプ氏がいいとはどこにも書いてなかったけど、それを読んだと。
素晴らしい、素晴らしい。はい。いやいや、わかっている。素晴らしい。はい、じゃあもう1人。
学生　なんというか、トランプ氏が当選した理由に、メディアで実は隠れトランプ氏の支持者が多かったっていうふうに言っていたけど、やっぱりそこは都知事選でもあったように、メディアで過激に叩くところを挙げられて、叩いてもいい人みたいにトランプ氏がなってしまったから、トランプ支持の看板を燃やされたとかっていうのがあったので、そういうところからトランプ支持者が隠れだして、支持率が下がって、ヒラリー側の応援が勝っているから大丈夫だろうって、安心しきっていたところもあったのではないかなと思います。

コメンテーター（社会人）A　報道のことというか、メディアのことを言いたかったのだなとよくわかりました。今度の大統領選挙のことで、メディアという問題にみんなが気づけたということだったなと思います。
外交評論家の元外務省の岡本行夫さんだったかな、彼が面白いこと言っていたのですよ、テレビで。同じことです。向こうの政治に関わっている人と話をすると、ヒラリー氏が勝つって言っていたけど、個人的に旅行をして、街の中で話を聞いたら、みんなトランプ氏が勝つと言っていると。いかに自分の感覚がずれていたかっていうのがよく分かりましたって、現地に行かなきゃいけないだなって反省しましたって言っていたのね。みんなとちょっと内容は違ったけど、メディアの向こう側に本当のところがあるのだろうな、っていうことに気づけたっていうのはすごくよかったと思います。僕もなるほどなぁと思って聞いていました。面白かったです。
コメンテーター（社会人）B　僕もちょっとあまり大統領選挙について、仕事ばっかりして、アンテナ張ってなかったんですけど。その中で情報を鵜呑みにしないというか、そういったところは、僕も社会に出て、お客さんの話を鵜呑みにしないとか、非常に学ぶところがありました。そういった習慣みたいなところを今からつけていった方が、大学時代をもっと謳歌できるかなと思いますので、頑張ってください。
コメンテーター（社会人）C　日本では結構ここにきて、ヒラリーさんを応援する声が多かったけど、アメリカでは局によってヒラリーさんを応援しているところと、トランプ氏を応援しているところが局によって違って、日本の報道とはちょっと違うのですね。
そういうのがユーチューブとかに上がっていたりして、翻訳ソフトを使ってうまくやると、本当トランプ氏を応援しているところもあれば、ヒラリーさんを応援しているところもあるので、比較したところまで入っていれば面白かったと思います。
発表学生　ありがとうございました。
コメンテーター（社会人）D　最後のメッセージが正にこれ、気づきかなと思っていて、報道の先に真実というか、本当に見なきゃいけないものがあるのだなっていうことに気づいたっていうことがすごくいいことだと思いました。個人的にはヒラリー氏のメール問題って、そんなに敗因の第一の原因ではないのかなと思っていて。要は比較すると、トランプ氏の方が極めてシンプルなメッセージだった、それに尽きるのかなと思っています。ちょっとそこが私はこの発表を聞いて、ちょっとどうかなと思ったところでした。はい、以上です。
内山　はい、ありがとうございます。あのそこに書いてあるのだよね、副題で。トランプ氏支持の真実、報道の。それが副題としてはある。あれはちょっと、まあ逆かもしれない。でも書き方としてはいいですね、ちゃんと副題になっています。
コメンテーター（社会人）E　ビジネスの世界は、すごいそうですよ。アナリストなんていうのは、ここは株が上がるとか、経済がこうなるとか、経済学者もそうですけど。結局それが外れてもまた、いやいや、自分

たちはこう思っていたから、やっぱりこれが真実だ、みたいなかたちで言ってくるので。自分たちがすごい意識を強く持って、いま、研究されたテーマっていうのはぜひ、ビジネスに活かせるテーマだと思うので、それを非常に汎用性があるものだと思って、これからも活かしていただければなと思います。ありがとうございました。

内山　そうですね。いいコメントですね。その通りなのだよね。だからこれビジネスに直結しているから、こういう君たちの姿勢っていうか、見方の姿勢が、すごく将来役に立ちますよっていうことを教えてくれたっていうことで、ちゃんと肝に命じておいてください。

コメンテーター（社会人）F　情報を鵜呑みにしないって、どうすればいいんだろうなっていうのが、逆に自分の中でも気づき、というか次のテーマになったかなと思っていて。全部が全部10点10点10点って、並べる点数表を出されたときに、こいつ実は演技が下手なのだろうと思わないよねっていうのを、じゃどうやって、自分がどうやってそれを見るのだろうなっていうのが次の課題かなと思ったので。ぜひこのテーマをみなさん考えられたのであれば、みなさんの中で、では鵜呑みにしないって、どういうことだろうねっていう、次の咀嚼をしていただければと思います。

内山　わかりました。ありがとうございます。それでは発表者1人ずつ簡単にレスポンスしてください。

発表学生A　情報を鵜呑みにしないためにはっていうのは、その物事に興味を持つことが大事だなと思ったので。やっぱ大統領選挙でトランプ氏が勝ったっていうのだけで、トランプ氏に入れた人たちは全員、トランプ氏を批判するようなニュースのことをあんまり頭に入れてなかったのかなと思うので。やっぱ興味持つ人は真実が見えているのだなと思った。自分の県の知事選挙とかには、ちゃんと調べてから行こうかなっていうふうに思いました。

発表学生B　隠れトランプ氏の可能性とか、そういったまだまだ可能性がいっぱいあったと思うので。それをもっともっと深く調べていけたら、もっといい発表になったのではと思いました。

発表学生C　自分もコメントいただいて、いろいろ考えてみたのですけど、鵜呑みにしないためにやっぱり自分が気になる話題は少し調べて、自分もその話題に対してしっかり意見を持つことがすごく大事だなと、この発表を通して考えることが出来ました。これからやっぱり自分で動きたいときは、しっかりその動くことに対する自分の意見を持って動いたら、今後鵜呑みにしないために、ちゃんと行動できるのかなと思いました。

発表学生D　アメリカの選挙だけではなく、日本でもこんな感じのことがあるかもしれないので。自分も選挙などに興味を持って過ごしていきたいと思います。

発表学生E　自分はトランプ氏が支持している局があることを知らなかったので、もうちょっと深く調べてから、調べればよかったかなと、ちょっと反省しました。でも結構ほめてもらえてうれしかったです。

内山　ありがとうございます。多分、これだけコメンテーターの方、来ていただいて、それぞれの職場で働いている社会人の方ですね。発表の仕方についてはね、本当にもう、ちょっと練習不足とかはあったにしても、つなぎの仕方とかバトンタッチの仕方も含めてみんな褒めているので、僕は、もうだいたいみなさんかなりできているし、他の大学と比べても遜色ないと思っています。ただ内容的には、いろいろまだ深めていくところがあるので、ぜひこれからも頑張ってほしいし、それからここに出たいま、話題で中間があったらいいねとか、いろんなところがみんなで共感できたところがありますよね。そういうのをベースにして次の発表につなげてってもらえたらいいと思うので、ぜひ頑張ってください。ありがとうございました、どうも、お疲れさまでした。

【学生へのインタビュー映像】

学生　やっぱり自分たち子供なので、まだ大人の方の貴重な意見をたくさん聞けたのですごくよかったです。

学生　いろんな人の意見が聞けて、ためになった。

学生　学生だけだと、どうしても幼稚って言ったらあれですけど、大人の意見（実践的な意見）が聞けていい経験だとこの授業は思います。ありがとうございます。

学生　自分の意見を発信できるっていうのは、いい経験だと思うので、学生のうちからそういうのをやっていきたいなと思います。

学生　前期までコメンテーターの方いらっしゃらなかったので。とりあえずまず時代の変遷とかもあって年代も違うから、年代ごとの意見っていうのは、前は聞けなかったので、それはすごいいい機会だなと思って。自分が発表する機会はなかったのですけど、すごいとてもいい経験になりました。

学生　社会で活躍している大人からの意見というのはすごく貴重でした。学生の目線からはいろいろ言えるけど、でもやっぱり実際に働いているとこうだって言ってくださるのは、本当に貴重で、勉強になると思いました。

学生　この授業はほかの授業に比べて、割と楽しい授業だなと思っていて。意見を出し合える機会は、他の授業ってないのですよね。自分の意見を言えたうえ、大人とか、学生の意見が聞けるので、とても楽しいと思っています。

学生　そうですね、後期からはコメンテーターの方がたくさん来て、議論の幅が広がるっていうか、大人の意見がたくさん聞けて、とても楽しい授業になったなって思っています。新聞とかニュースは一応しっかり見るようにはしているので、結構共感して、ここは違うかなとか思いながら、発表聞かせてもらっています。ディスカッションして、みんなでやるのが結構楽しくて、そういうのできるのって授業限られる。僕が取っている授業ではこの授業しかないので、大切にしていきたいなって思います。

（映像終了）

司会

内山先生ありがとうございました。2部の説明終わりましたので、質疑応答に入らせていただきたいと思います。板橋の先生、ご参加の先生、また東松山のご参加の先生でご質問のある方、お願いいたします。

質問者A　基本的なことをお聞きしますが、どの授業でこれをされたんでしょうか。つまり授業の名前と、その専門的にはどういう？

内山　該当科目は、1年生の問題解決という授業でした。が、今回（2016 年度）の学科統合に合わせて授業の名前が変わりまして、知識情報マネジメントコースのナレッジマネジメント方法論という科目で、今は2年生の科目になっています。

質問者B　この講座では、プレゼンをする前に事前のグループワークみたいなものを何回か行っているのですか。

内山　いえ、やっていないです。これは全部で15回授業がある中で、最初にこんなことやるよっていうやり方の説明。2回目にやり方というか、さっきの講義の中みたいなものをやったことのある人を連れてきて、1回プレゼンさせて、こんなことでやっていますと。あとはグループ決めさせて、そのあとジャンケンでいつやるかっていうのを決めさせています。だいたい、1つのコマで4グループやらせているんですよ。ちょっ

と多いかなと思うんですけど、逆に暇が空いちゃうよりかは、詰めてやった方がいいので、4グループびっちりやっています。結構面白いので、集中してやっています。これ逆に3グループにしちゃうと、スカスカになると逆にダレているので。短い時間でガーっとやらせる、これはちょっとコツかなって思います。

質問者C　そこにいた社会人のコメンテーターの方。あれは、先生がお知り合いの方を連れてきたのですか。

内山　そうです。それが難しくて。今回は申請にも出したのだけど。これ固定化しないとなかなか難しいのですけど、やっぱり普通の日ですと社会人の方が来られないから、人がその場その場で変わっているのですね。社会人のマネジメントって難しい。勝手なことを言い出すと、今度は収集つかなくなっちゃって。説教し出す人までいるので、説教いいよっていう感じなのだけど。ある程度固定化しておいて、社会人をうまくマネジメントしますと、まあうまくいくかなと。僕はとりあえず知り合いで連れてきましたけど、あとゼミの卒業生とか、いろんな方がボランティアということで来ていただいている。もうちょっと固定化してやるといいなっていう気がします。

質問者D　評価を与えてらっしゃいましたけど、あれはグループごとに。

内山　そうなのです。あれがコツなのですよ。俳句のプレバトのです。あれすごい人気あるじゃないですか。あれはどこが人気あるかって、評価なのですね。芸能人を凡人だとか才能あるとかやっているのですよ。あれがもうすごくいい、面白いなって思ってね。その必ず理由を言うのですよ、君たちのプレゼンのここがよかった、悪かった。それをきちんと言いながらAだSだってやると、非常に学生たちも頑張ろうみたいな、ここ悪かったのかと。だからその場で必ず付けます、はい。今日は40名。S、2つで、A、2つ。ちょっとおまけが多すぎたのですけど、もうちょっと厳しくしないといけないけど、つい甘くなってしまうのですよね、どういうわけか。みんな、よくなってしまうっていいますか。でも、その場でやることが大事です。それから出席も必ずその場でとります。あれが非常に平日ベースのコミュニケーションで重要なので、参加型になる入り口としてはあそこの最初に入ってきたときに、出席を一人ずつきちっと取っていってやるっていうことですね。そこはやっぱり参加型の一つの大事なところです。

質問者E　ありがとうございました。グルーピングの方法なのですけども、どういうふうに組んだのかっていうことと、そのグループの中でテーマ設定っていうのは、自由に出されたのか、ある程度の枠をはめたのかっていう 2 点についてお伺いします。

内山　重要なご質問をありがとうございます。そうですね、これもいろいろご意見あると思うのですけど、僕の場合はですね、経験的なのですけど、僕らの時代は、逆に今おっしゃったような疑問がすごく出て、グループよく作れるなと。僕らの時代はなかなかグループ作るとはみだし者が出ちゃって、なかなか時間ばかりかかっていたと思ったら、この大東の学生は、僕が始めた 2000 年のころからもう10人以下で作ってと言ったら、1人の落語者もなくグループができます。これは僕の力でもなんでもなくて、学生がやる訓練ができているのですね。ですからなんの心配もなく、やったらできちゃったのです。紙にグループ名書いて出させまして、それぞれにつけさせるのですよ、セブンだとか、回転寿司とか、いろいろ勝手にグループ名つけまして。

ただ問題は発表順なのですね、やっぱり最初に発表するのは大変なので。4チームずつやるにしても、発表はジャンケン。トピックは、これは全く自由です。全く自由なのですけど、例えばさっきのスマホにしても晩婚化にしても、あるいは大統領選にしてもね。ああいう名詞で付けちゃうとちょっと議論が進まない部

分があって、ここがコツだと思うのですけど、『○○するとはどういうことか』っていう、その名詞が、どういうことかという題で議論していただくために、その題のつけ方だけは指定していました。何をトピックにするかは全く学生の自由です。たまたま今日は、4つやったのですけど、一つは敬語を使うとはどういうことかですね。もう一つは、選挙で投票に行くとはどういうことか、こないだの衆議院選ですね。もう一つは、終身雇用であるとはどういうことか。で、これ自己主張だと思うのですけど、主張するとはどういうことか。この四つがたまたま今日出まして。今日は今日でなかなか面白い議論できてですね、終身雇用とはどういうことか本当に深い議論ができました。
終身雇用であることを、いまの学生はあんまり好んでないと思うのだよね、本当なのかな、ちょっとよく分かんなかったのだよね。例えば企業の人事の方とか、そういう方には非常に参考になる意見を言っていましたね。終身雇用って、やっぱり彼らにとってはすごいこう、嫌なのだというイメージがあるわけですね。そのきっかけは2次会に行かない人が多いと。あるいは上司に誘われても飲みに行かない人が多いって、何でなんだろういうところから、彼らは話が始まっていきました。そういう話があって、どうしてなのだろうって言ったら、やっぱりそれは、終身雇用ってことを考えると飲みに行かざるを得ないと。そういうのが嫌なのだと。そんな理由ですよ、終身雇用が嫌だって理由。そういうことでいろいろ話してくれてね。
解決策がまた面白いのですよ。彼らの解決策はですね、そういうことで辞めちゃうと逆にその人に早く辞めたと色がついちゃうと。それはまずいから、ある一定の、例えば転職オーケーの境目って法律や制度を作れと。例えば、この期間だったら転職オーケーって、その法律を作れば、その制度の中で辞めた人は色がつかないと。そういう期間が作らないと、どうしても辞めるタイミングがないのだっていうんだよね。これがまたすごい卓見でね。これいま、働き方改革いろいろやっているじゃないですか、こういう意見は大人から絶対出てこないですよ。今日すごく面白かったです。そういう面では、自由で選ばせているがゆえの発見みたいのはありますね。

質問者F　質問じゃなくて、感想でいいですか。僕は経済学部に所属していますけど、元々の専門は法律なんで。学生集めてディスカッションやると、どうししても制度論の方に引っ張られて、さっきのスマホなんかでもそうです。ただ経営学部の学生は、あまり制度うんぬんじゃなくて、それが非常に新鮮だったというか。もしこういう講座をですね、全学部の学生を集めて、あまり学科とかに縛らないでグルーピングしてやると非常に面白くて。ただ、まとめるのは大変でしょうけれども。それこそ最近話題になっている、初年次教育あたりにやったら非常に面白いのかなと。学部学科の枠を超えてね、という印象を持ちました。ありがとうございました。

質問者G　そうですね。先生のちょっと評価がずいぶん甘くなってしまうということをおっしゃっていらっしゃいましたけども。やはり評価というのは、甘くなってしまうものなのでしょうか。例えばこのグループにはやっぱりBつけざるをえないとか、Cつけざるをえないなどはあるのでしょうか。
内山　そこはもう難しいかな。それG先生の場合はどうですか、結構B評価などつけるのですか。
質問者G　点数でやっています。
内山　点数でもほら、どこまでAとかBとかあるじゃないですか。それで何％くらいBつけますか。
質問者G　テストなので。それに合わせて。年によっては多少AとかSが多くなることもありますし、逆に、BとかCとかが多くなってしまうこともあります。
内山　なるほど。年度ごと難しい面があるのですね。これはどうですかね、僕の場合はもうちょっとBつけた方がいいかもしれないですね。ちょっとやっぱり甘いのかな、よくないですね。あの俳句の夏井先生。あ

の方は結構、きついこと言いますもんね。言った方がいいと思うのですよね。
質問者G　自信をつけるという面では、確かにその、いいかなと思うのですけど。
内山　いや、そういう意味では甘くしてはいけないと思うのですよ、逆に。それは絶対自信つかないですよ。悪いのに良いって言って自信にならないので、それはちゃんと言わないといけない。
ただ、前期と後期に2回ずつやっているのです。そうすると僕は必ず前の成績、前どういう議論をして、どうだったかをここに書いてあるのですよ。実は、2回目にやったときの幅ですね、それを見ているのですよ。要するに前に例えば、非常にこういう発表の、例えばアイコンタクトできていなかった、次に僕が言ったことに対して非常にそこが改善されたっていうと、グッといい点がつきますね。ちゃんと理由を言っているのですよ。だから最初からいい人たちは、いいのでしょうけど、悪い人たちでも、その伸びしろでね、良い悪い、それ理由言います。ちょっと甘いかもしれないですね。
質問者G　ありがとうございます。最終的には個人でつくのですね、成績は。
内山　ここ言っちゃうと怒られちゃうかもしれないけど、グループでつけています。だから、グループでほとんどAが全部います。ところがね、時々欠席する人いるのですよ、そういうときはちょっとBとかCとかね。あるいは学生で、学生のコメントってマイク回すでしょ。その中にすごくいいこと言ったときは二重丸をつけといて、例えばそのグループがBであってもAにするとか。そういうちょっとした微修正は行っていますけど、原則的にはグループで。それはちょっと問題、多分あるというふうに思ってはいます。

司会　ありがとうございます。本日は長時間に渡り、内山先生ありがとうございました。閉会のあいさつということで、全学プロジェクト予算委員長、青木先生よろしくお願いいたします。

青木　学生さんいなくなりましたけども、ご参加いただいた先生方、職員の方、長時間ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。それから内山先生、貴重な議論と、それから講義まで公開してくださって厚く御礼申し上げます。僕は内山先生と同じ学部なので、ここ15年間、いろいろ評価、お話をお聞きして、僕はどちらかというとアメリカ型の仮説検証型でいつも怒られているんですけども、今日は長時間、聞いて、内山先生のアコモデーションとかリアリティーとか、その意図は少しわかってきたように思います。私もですね、経営学やりながら、マネージャーの育成っていうので、大学院で実際の企業の現場へ行くのです。確かに理論を教えただけじゃ育たない。言葉は違うのですけど、非常に今最近似ている方法論があって、やっぱり経験から学ぶ。経験から学んで、それを内省してリフレクションして持論形成をするっていうのは、なんか似ているなと非常に感じました。特にリフレクションをどうさせるか、それから内観。そこは意外と難しくて、やっぱり社会人の方が参加すると、リフレクションが進むのかなというような感じでビデオを見ておりました。そういう面では、非常に参考にさせていただきました。先生方、長時間に渡ってありがとうございました。感謝申し上げます。
司会　以上で、今日の研究会を終わります。

第２回全学ＦＤ委員会主催研究会
報　告

「東松島フレンドシップＰＢＬ事例報告会」

講　師：第１部　中野　泰彦　事務長（地域連携センター事務室）
　　第２部　齋藤　博・鶴田　佳史・飯塚　裕介
　　（環境創造学部　環境創造学科教員）

日　時：2018 年 1 月 16 日（金）17:00～19:00

場　所：板橋校舎 1 号館 1-0314 情報
　　東松山校舎 631 階段教室

2017年度 全学FD研究会

第2回

東松島フレンドシップPBL事例報告

2018年
1月16日 火 17:00–18:30

東松山キャンパス6号館［631教室］
板橋キャンパス１号館［1-0312 情報教室］※遠隔システム利用

■開会挨拶　全学ＦＤ委員会委員長　中村　年春

第1部

17:00～17:30

「東松島フレンドシッププロジェクト概要」
中野泰彦(地域連携センター事務室事務長)

「参加学生による、プレゼンテーション（実演）」
東松島フレンドシップＰＢＬ参加学生（Aグループ）

第2部

17:30～18:30

参加教職員パネルディスカッション
齋藤　博(環境創造学部環境創造学科准教授)
鶴田佳史(環境創造学部環境創造学科准教授)
飯塚裕介(環境創造学部環境創造学科講師)
中野泰彦(地域連携センター事務室事務長)

■閉会挨拶

お問い合わせ

全学ＦＤ委員会（学務部学務課）
E-mail: gakumu@jm.daito.ac.jp
TEL: 03-5399-7333　FAX: 03-5399-7334

2017年度 大東文化大学 第2期 東松島フレンドシップ PBL 概要書

◆基本事項◆　　2017年8月10日現在

期間	2017年5月19日（金）から9月22日（金）　【現地調査研修：8月27日（日）～9月1日（金）】
事業概要	Project Based Learning（通称：PBL）は課題解決型授業といい、あらかじめ設定された課題（問題）やテーマについて、グループワークや討論を通じて解決策を導き出す授業である。ポイントは指導者からの一方通行的な授業ではなく、受講者（学生）が協力し合って結論を導き出すことにある。 学生を5名1組のグループを3組編成し、それぞれのチームでのグループワークを通じて答え（提案）を導き出す。 今回の研修は、事前研修として学内で東松島市の概要や現状について学び、現地から招聘する講師により東松島市が直面する課題を提示していただく。研修の最終段階では5泊6日の現地調査研修を実施し、最終プレゼンテーションでは東松島市長をはじめ同市関係者、市民等を招いての発表会（提言）をおこなう。
研究活動テーマ	①【No.10】定住化促進のための起業サポート （斉藤准教授・復興政策課 地域振興班 菅原氏） ②【No.18】「東松島食べる通信」の関係性を活かした“教育(体験)旅行”の提案と検討 （鶴田准教授・東松島食べる通信 太田氏） ③【No.20】震災伝承館の活用 （飯塚講師・復興政策課 リーディングプロジェクト推進班 小野寺氏・成澤氏）
東松島市 担当部局	東松島市役所 復興政策部 復興政策課 リーディングプロジェクト推進班 片倉 悠希 氏
派遣教員	大東文化大学 環境創造学部　准教授 齋藤　博（さいとう ひろし） 准教授 鶴田 佳史（つるた よしふみ） 講　師 飯塚 裕介（めしつか ゆうすけ）
運営責任者	大東文化大学 地域連携センター事務室　事務長　中野　泰彦
参加資格	学年および学部学科を問わず、公募による研修希望者15名とする。 但し、必要に応じて申込時には面接や課題論文の提出を課すことがある。
説明会日程	2017年4月7日（金）・4月14日（金）・4月21日（金）　12：40～13：00 東松山キャンパス 5号館　5－0312教室
申込締切日	2017年4月26日（水）　地域連携センター事務室　（東松山キャンパス・大東文化会館）
宿泊先	バリュー・ザ・ホテル　東松島 矢本
活動日	下記日程の　17：00～18：30　東松山キャンパス【5-0312 (5/19のみ8242教室)】にて実施する。

◆活動計画◆

日程	授業区分		内容
2017年5月19日（金）	イントロダクション		PBLとは何か？・活動の進め方・東松島市の概要【地域連携セ・中野事務長】
2017年5月26日（金）	事前研修①		東松島市の暮らしからみえるもの【東松山市役所 内田氏】
2017年6月 9日（金）	事前研修②		現地からの課題出し【東松島市役所 復興政策部長 小山氏・片倉氏】
2017年6月16日（金）	事前研修③		グループワークⅠ
2017年6月30日（金）	事前研修④		グループワークⅡ
2017年7月14日（金）	事前研修⑤		グループワークⅢ
2017年8月 3日（木）	事前研修⑥		グループワークⅣ
2017年8月24日（木）	事前研修⑦		グループワークⅤ
2017年8月27日（日）	現地研修	移動日	9:30　高坂駅集合 / 10:00　高坂駅発　※チャーターバスで移動 16:30　宿泊施設着予定
2017年8月28日（月）	現地研修	東松島Day	AM：市内視察、ＰＭ：班別自由行動　18:30～20:30：東松島市役所職員との交流会
2017年8月29日（火）	現地研修	現地研修	研修日：つながるYeah！、東松島市内各所
2017年8月30日（水）	現地研修	現地研修	研修日：つながるYeah！、東松島市内各所
2017年8月31日（木）	現地研修	現地研修	9:00～17:30研修、17:30～19:00：報告発表会、19:30～：意見交換会「ちゃんこ萩乃井」
2017年9月 1日（金）	現地研修	移動日	9:00　宿泊施設発 / ～11:00　関係機関挨拶　※チャーターバスで移動 16:00 高坂駅着予定
2017年9月22日（金）	事後研修		活動報告レポートの提出

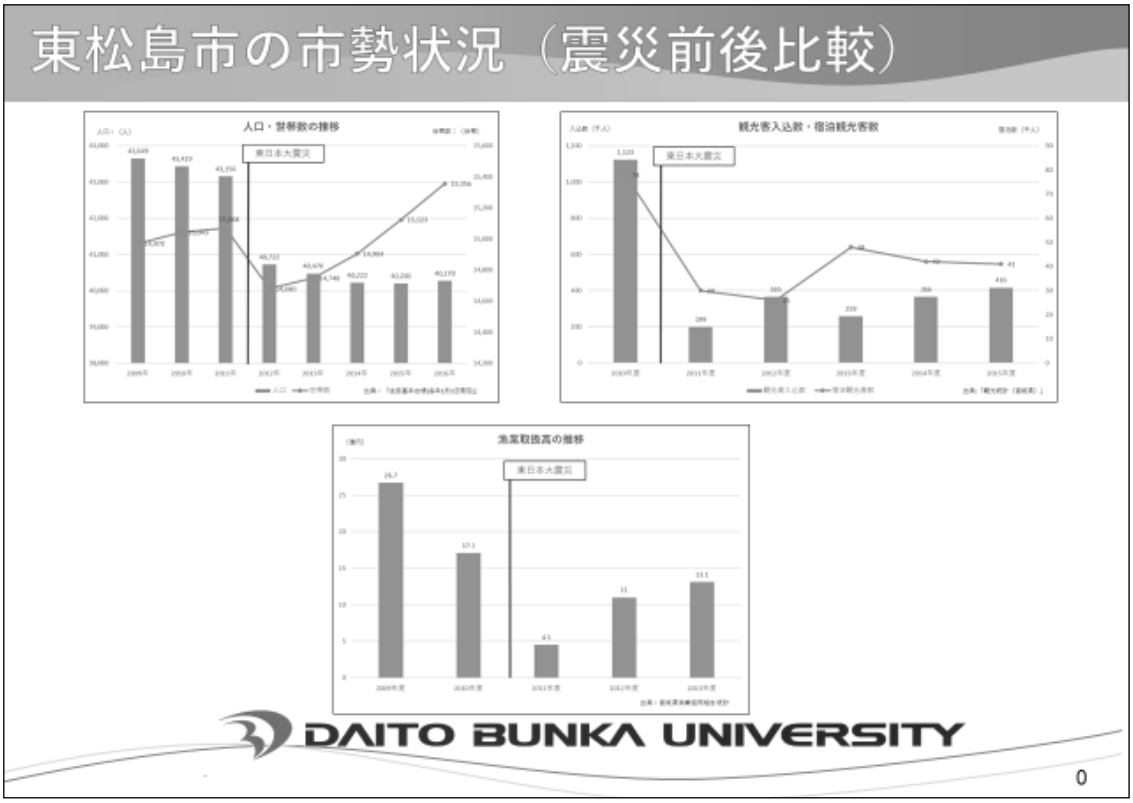
第2回FD研究会（東松島PBL）（前半）

「東松島フレンドシップPBL事例報告」と題し、地域連携センター・中野泰彦事務長を講師に招き、地域連携センターと東松島市との交流について講演が行われた。冒頭より、東日本大震災の猛威、東松島市の被災状況の説明があった。

事務長：

東松島市の市政状況（スライドA）で、3件のグラフがあるところのページをご覧いただければと思います。それぞれ人口世帯の推移、観光客、宿泊客の推移、旅行取扱高の推移となっております。震災前、東松島市は鳴瀬町と矢本町とに分かれておりましたが、合併特例法を契機とした 2005 年の平成の大合併時に、この二つの町が合併して一つの東松島市が誕生いたしました。

（スライドA）



人口の推移につきましては、2009 年度には約 43,000 人をピークとして、震災によって、一番少なくなった年は、14,680 まで減少し、ピーク時の約60パーセントまで減少したとなっております。

観光客、宿泊客の減少も同様で、日本三景の奥松島に位置する東松島市にとっては年間110万人の観光客を擁していた、観光・交流事業の復活、観光財源の確保、また、定住人口の回復やそれに伴う新たなコミュニティーの形成、こういったものが、震災復興における重要な課題と位置づけられております。

続きましては、資料で7ページ（スライドB）になります。本学と東松島市との関わりという部分をご覧いただければと思います。

（スライドB）

これまでは東日本大震災における、被災状況と復興過程における諸問題についてご説明しましたけれども、ここからは本学と東松島市との関わりについてご説明したいと思います。

本学のキャンパスがある東松山市は、東日本大震災で大きな被害がありました、宮城県の東松島市との市の名称が、一文字違いという、親近感から、震災前から両市との間では、市民レベルでの、交流事業が少なからず行われていました。

震災があった時、いち早く東松山市は、東松島市側にコンタクトを取り、また東松山の優良企業であるボッシュの独自の支援活動とリンクをさせ、互いに協力をしながら、東松島市の災害復旧の手助けをされてきたと聞いております。

その後、東松島市における現地ライフラインの復旧が一段落した中で、今度は被災された方々を、応援し、励まそうという取り組みが行われるようになります。その時点、2012 年の秋から本学もお手伝いをさせていただいている状況でございます。

本学の最初の活動は、相撲部の学生さんの協力を得て、現地の祭りで「ちびっこ相撲」を開催したことが、きっかけとなっております。以後、またさまざまな取り組み、その次のページ（スライドC・D）にもございますけれども、管弦楽団によるコンサート、現地で活躍している方々をお呼びして、復興応援講演会、これは、東松島市で震災復興に立ち向かう若者を招いて「あの日で変わった自分の生き方」をテーマにして、東松山の記念講堂を会場にして講演してもらいました。これまでのところ、学生主体による復興応援活動を継続して実施しており、今年度で 5 年が経過しようとしています。また、昨年の1月には本学と東松島市との間で、地域連携基本協定を締結しました。今後、さらに活動を活発化させて、東松島市との交流事業を進めていきたいと、地域連携センターとしては考えております。

（スライドC）

東松島市におけるこれまでの活動

年度	活動内容
2012年度	「ちびっこ相撲」（相撲部）
2013年度	第1回　管弦楽団 復興応援コンサート
	のびる地区民まつり 応援演舞（全學應援團）
	第1回　ローバースカウト部によるボランティア活動
2014年度	第2回　管弦楽団 フレンドシップコンサート
	復興応援講演会（本学東松山キャンパスにて開催）
	第2回　ローバースカウト部によるボランティア活動
2015年度	JR仙石線開通記念式典 応援演舞（全學應援團）
	第3回　管弦楽団 フレンドシップコンサート
	第3回　ローバースカウト部によるボランティア活動
2016年度	第4回　管弦楽団 フレンドシップコンサート
	第1期　フレンドシップPBL（選考により選抜された学生15名）
	ひがしまつしま福幸まつり 応援演舞（全學應援團）
	第4回　ローバースカウト部によるボランティア活動
	地域連携基本協定締結（2017年1月27日）
2017年度	第5回　管弦楽団フレンドシップコンサート
	第5回　ローバースカウト部によるボランティア活動（予定）
	第2期　フレンドシップPBL（選考により選抜された学生15名）

DAITO BUNKA UNIVERSITY

2

以下のページに関しましては、それぞれのプログラム紹介になります。フレンドシップコンサート。これは教職員等も参加しまして、コンサートの運営から、東松島市の、お手をわずらわせないコンセプトも踏まえながら、毎年、実施しているところでございます。本年度で、5回目を数えております。

（スライドD）

プログラム紹介1（管弦楽団フレンドシップコンサート）

コンセプト

【学生と教職員による運営で開催】

会場受付や警備誘導を含め全てを本学で対応（自主運営）し、東松島市の負担を軽減するとともに学生・教職員が一丸となった手作りコンサートを実施しています。

※広報情宣活動の一部を東松島市に協力を依頼。

【幅広い世代に親しまれるコンサート】

来場者全員にエールを贈ることをモットーに幅広い世代から親しまれる曲を管弦楽団の学生と選曲をして演奏しています。会場が和み、一体となるクイズなども入れて、例年盛況となり好評を博しています。またコンサートの最後は震災復興の応援ソング「花は咲く」を学生の演奏に合わせて、会場内の全員で合唱します。

DAITO BUNKA UNIVERSITY

3

続きまして、ローバースカウト部の活動です。震災後、これも毎年春休みを利用して、酷寒の中、2月の東松島市に滞在して、震災当初は瓦礫の撤去作業等を主にやっていましたけれども、近年ではインフラ整備もだいぶ進んでいることから、子どもたちのためのツリーハウスの製作であったり、森林植生、漁礁の製作など幅広い活動をしております。お手元の資料（スライドE）で、活動風景を写っていると思いますが、ご覧のような活動をしていると、ご認識いただければと思います。

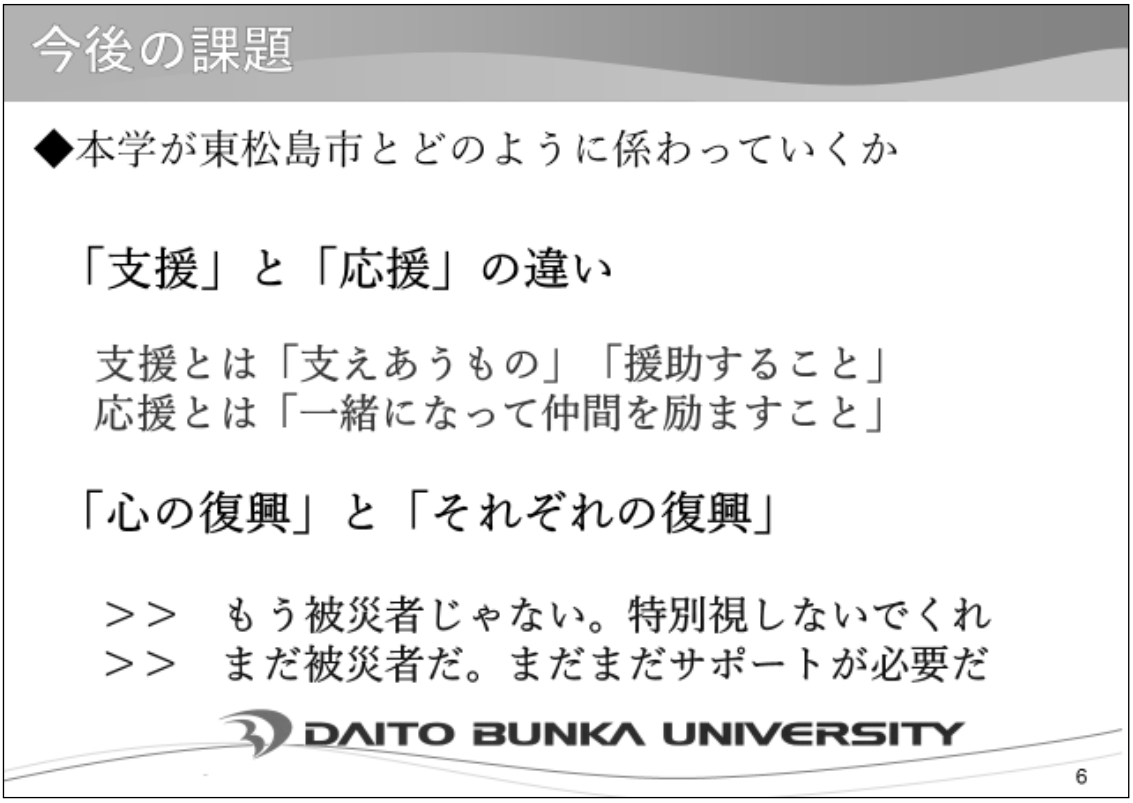
（スライドE）

先ほども触れましたけれども、復興応援講演会です。（スライドF）あの日で変わった、自分の生き方として、壊滅的な被害を受けた、海苔漁師・相沢太さん、都内の会社に勤めていましたけれども、居ても立ってもいられない、何か東松島市の役に立ちたいと言うことで、現地に移住をされた、太田将司さんという、お二人の方を招いて、このような講演会をさせていただきました。

（スライドF）

以上のような取り組みを、震災後、続けております。震災経過後7年がたっております。本学としては、5年のお付き合いとなっておりますが、今後、本学が東松島市とどのように関わっていくかについて、簡単にご覧願います。（スライドG）

（スライドG）



まず、本学のコンセプトとしましては、「支援」と「応援」の違いを第一に考えて活動をしておりましたし、これからもこの基本姿勢は踏襲して行きたいと考えております。

スライドについて、これらを意味するものとして「支援」は、言葉のとおりになりますが、支え合うもの、援助するものと、言葉としては非常によろしいのかなと思いますが、応援とは、一緒になって仲間を励ますことと言う意味合いが込められていると考えております。

支え合うこと、援助することも良いですが、われわれは東松島市の皆さんと一緒になって、皆さん心の痛みがわかる学生を育てたい。そして大学として復興事業にいつまでも、携わっていきたい、こういう願いを込めて、活動当初から応援と言う言葉を使っております。繰り返しになりますが、今後もこのような、気持ち、スタイルで臨んでいきたいと思っております。

それからその下の部分、心の復興とそれぞれの復興という部分です。私どもも現地に入った際に、どうやって現地の皆さんと接していこうかということが、今一番の課題になっています。

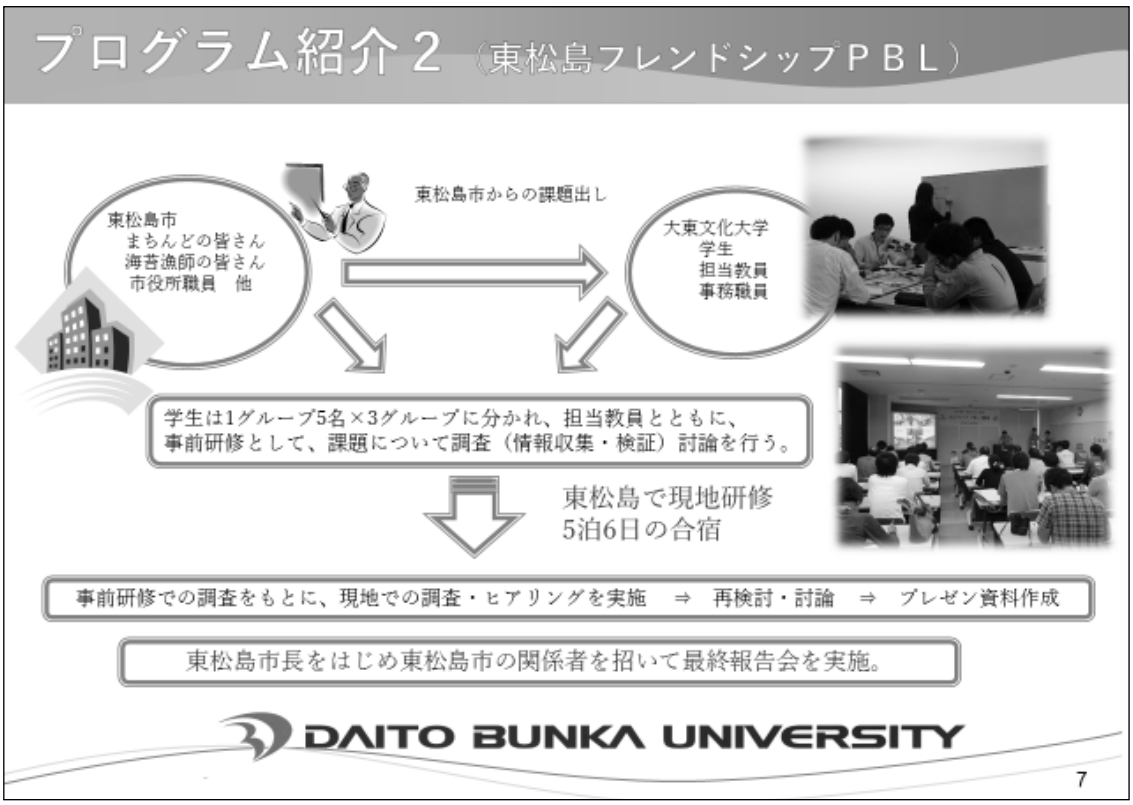
それは、もう被災者じゃない、特別視しないでくれと言う方がいる一方、いやまだまだ、私たちは被災者だ、まだまだサポートが必要なのだと言う方が、ちょうど半々ぐらいいらっしゃいます。

そういった中で、われわれが現地のニーズをどのように捉え、そしてわれわれの若い力をどのように発揮できるか、こういったものを現地の皆さんと、話し合いながら、今後とも解決に向けて、進めていきたいと思っているところでございます。それがのちの東松島フレンドシップPBLに繋がっていきます。

以上が、本学と東松島市との関わり、関係というところでご説明をさせていただきました。

続いては、東松島フレンドシップPBLに参加した学生による、現地でプレゼンテーションを行いましたけれども、それの実演ということで、今年、担当した学生の一つの班です。
時間の関係で一つの班になりますけれども、その班の説明をさせていただければと思います。

学生の皆さんが準備を進めている間に、私の方で、東松島PBLの概要についてご説明いたします。



昨今、本学においても、PBL型授業への関心が高まりつつあることは、会場の皆さんもご承知のことと存じます。そういった中、多くの学部で、このPBL型授業が導入されはじめ、または取り組みの検討が行われてきているところでございます。
私が記憶するところでは、国際関係学部の正課の授業として、国際関係学部の新里孝一学部長が、2014年度に、東松山市役所の皆さん方と共同で、ウオーキングイベントを通じた、若者の参加を増やす取り組みとして実施したのが最初の取り組みだと記憶をしております。
今回ご紹介をする、東松島フレンドシップPBLについては、これまでの社会連携、社会貢献活動の実績を踏まえ、若者の視点で震災復興に取り組む、東松島市のPBLによる復興応援ができないかということが発案のきっかけとなっております。

このPBL授業に関しましては、それが教育事業と社会連携、社会貢献事業の双方の役割を担う考えから、私どもの地域連携センターで企画立案をし、今回の東松島フレンドシップPBLが誕生いたしました。
この事業は、これまで2回行っております。開始初年度となる、昨年度は、新里先生のこれまでのご経験を活かしていただき、新里先生にご担当いただきました。
先ず、参加する学生につきましては、4月のガイダンスで、主に1、2年生に募集しましたところ、大変多くの学生が興味を示しました。約50名の学生が説明会に参加し、実際に26名の学生から応募がございま

した。ですが、事業計画、予算の関係もございましたので、応募者全員を、現地に派遣し、研修を行うことが難しい状況でしたので、応募してくれた26名の学生には、志望動機を提出してもらい、そこから、断腸の思いで15名の学生を選抜しました。

昨年のテーマは、東松島食べる通信の市内購読者数の拡大戦略。市民による食の宝庫東松島の再発見ということで行いました。
次に、もう一つは東松島市の交流人口の拡大方策としまして、観光振興の活力になりますが、新たな観光および、農業開発の他市町村との交流、連携、こういったものでやっております。
それから、三つ目の課題としましては、東松島市の新しいコミュニティーの形成と課題。市民による新たな東松島の街づくりということで行いました。
新たなコミュニティーの形成は、簡単に申しますと、津波で被害があり、家も流された人が、新しい地区に移り住んでくる。そこにはもともと住んでいる方々が居る。
元々住んでいる方は、震災による家屋への被害は大きくなく、新しく移り住んでくる方の殆どは震災前に沿岸部に居住されており、地震や津波によって、身内や親しい方々を亡くし、家屋も流されたり、住めなくなくなってしまった方が大半を占めています。これらの方々が同じ地区に一堂に介し、新しい生活を始めるとなると、やはり様々な問題が発生することは言うまでもありません。そういった部分の解決の提案に当たり、我々が、よそ者、若者の視点で、新たな発見、私たちはこう思うよ。という提案を、東松島市に対して提案していく。ですから、このプロジェクトは、課題解決型とPBLと云いますが、この課題は解決されていないとも思えます。しかし、私共は、課題解決まで至らなかったが、本来の趣旨でもある課題解決までのプロセスを重視したということを念頭に置いていた部分もあるので、地域連携センターとしては、ひとまず、これで良かったのではないかと考えております。
重なる諸問題に関しましては、先ほども、副学長でもある中村年春地域連携センター所長からご紹介がありましたけれども、環境創造学部の齋藤博先生、鶴田佳史先生、飯塚裕介先生の3名の先生にそれぞれチームに入っていただき、各チームの指導をしていただきました。
3チームのテーマについては、まずは、震災伝承館の活用。これは現地に震災伝承館という施設がございまして、震災を風化させない、そういった広報 PR 活動を行っている設備がございます。それの活用方法についても検証しました。それから、東松島市での定住化促進のための起業サポート、起業は起こす業、起業サポート。それから、東松島食べる通信の関係性を活かした、教育旅行の提案と検討。
以上、3つのテーマを東松島市役所さんから提供してもらいまして、初年度と同じように、事前研修を約5回、それから現地研修を今年度は5泊6日の現地研修を行いながら、続けてまいりました。
それでは、参加した学生さんの準備も整ったようですので、実際に東松島市で行った、プレゼンテーションを実演として披露していただければと思います。では、お願いします。

学生①:震災復興伝承館チーム、Aチームのチームメンバーの、大東文化大学文学部日本文学科 2 年、平野みずきです。
学生②:経営学部経営学科1年の富所幹人です。
学生①:
チームメンバーは5人ですけれども、今回は、私と富所で発表いたします、よろしくお願いいたします。震災復興伝承館は、東日本大震災の被災記録や、教訓を後世に伝えることを目的として、旧野蒜駅の駅舎を利用して、震災当時の写真や、映像を展示している施設です。私たちのチームでは、この震災復興

伝承館の活用方法を検討しました。

東日本大震災では、想定を上回る災害の状況に対して、警報の意識の薄さや、臨機応変に行動できなかったことが、人的被害を大きくした要因の一つと言われています。そしてそうした被害を減らす上で、事前の防災教育の重要性が、再認識されるようになっています。
そこで震災復興伝承館の活用策として、震災復興伝承館に、既存の展示物に加えて、津波避難訓練の、防災教育プログラムを考えました。
通常の避難訓練というと、いざという時に、臨機応変に対応できるような訓練を施されておらず、決められたルートで避難するといった形で行われてきました。
実際の被害について、現地の方にお話を伺うと、予想外のことばかり起きたそうで、予想外の事態に対応しないと、本当に、効果的な避難訓練にならないのではないかと考えました。また、震災を経験していない人にとっては、通常の避難訓練では、想定された災害の切迫感を理解しにくいと考えました。
避難している時に、予想もしていないようなことが起きても、自らがどのような行動をすれば良いのか、一人ひとりがしっかりと考えることが大切です。
そこで、私たちは、音声ガイドによって、刻々と、予想外の事態が伝えられる中で、被害の状況をイメージしながら行える、新たな津波避難訓練のプログラムを考えました。
私たち、Aチームが提案するプログラム名は、「サウンドVR津波避難訓練、音を頼りに津波から逃げろ」です。
このプログラムは、地震が発生し、その後押し寄せる津波から避難する訓練で、災害に起こるさまざまな音を聞きながら避難します。どのような音が流れてくるのかは、後のスライドで実際に聞いていただきます。
このプログラム名のVRとは、バーチャルリアリティーのことで、機器を装着すると、現実ではない、仮想的な世界を、あたかも現実かのように体験できるものです。通常は、主に、視覚を利用したVRですが、今回私たちが提案するプログラムは、聴覚を主に使って、耳から流れる音によって、地震が起きた時の空間に居るような体験ができます。
この避難訓練では、音を聞きながら、自分が今居るところから、避難所まで実際に歩いて避難します。避難する際には、耳から流れてくる音から、自分の置かれている状況を把握し、全て自分の判断で行動することが重要です。
東日本大震災の教訓を踏まえ、震災を経験したことのない人を対象として、入ってくる情報と、自分が置かれている状況を判断し、自分の命を守るために、どのような行動を取るべきなのかを考えさせることを目的としています。
最初にも述べたように、通常の避難訓練では、地震が起きた時に予想外の事態に対応できなかったり、想定された災害の切迫感を理解しにくい問題点が上げられます。よって、音によるVRを使い、リアルな、疑似的避難訓練をすることで、予想外の事態に、臨機応変に対応する力を身に着けさせられると考えました。

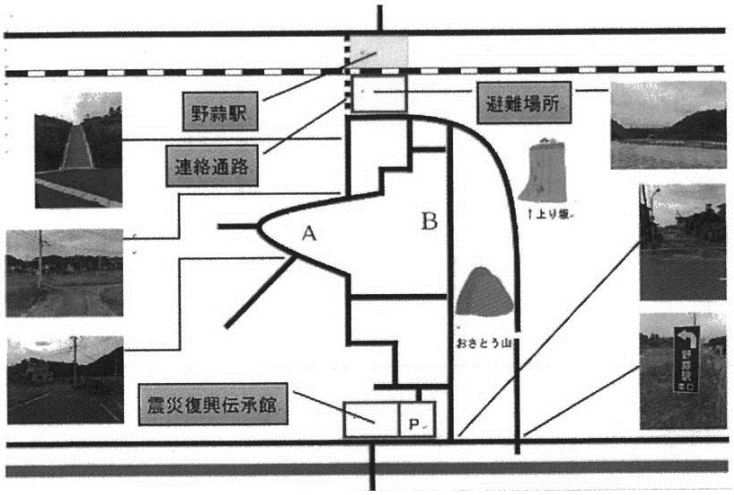
学生②:
次に、実際に使用する研修プログラムのシナリオについて説明します。今回の研修プログラムでは、災害発生後の時間経過を、ラジオやナレーションの他、警報音や、効果音などの音を挿入することによって、よりイメージしやすく、臨場感を体験できるプログラムとなっております。お手元の東松島フレンドシップPBL、Aチーム(震災伝承館)と書かれたプリントをご覧ください。

東松島フレンドシップPBL　Ａチーム（震災復興伝承館）

1. プログラム概要

地図配布・内容説明→緊急地震速報のＪアラート→地震発生→地震発生を伝えるラジオ放送→震度を伝えるＪアラート→震度と震源地を伝えるラジオ放送→大津波警報のＪアラート→ナレーションによる避難指示→大津波警報が伝えるラジオ放送→ナレーションで周辺の建物を伝える→周辺の建物の倒壊を知らせるラジオ放送→ナレーションによる車両事故や火災、土砂崩れといったハプニング説明→避難完了→津波到達→津波到達を伝えるラジオ放送→ナレーションによる終了のアナウンス

2. 地図



3. QR コード（youtube が開き、音声ファイルが再生されます）

このシナリオは約30分で、震災復興伝承館から野蒜駅のロータリーまで、地図を使って、津波から避難していただく内容となっております。また、途中の地点、A、Bなどで、さまざまなハプニングが発生するので、より濃い内容の避難訓練となっております。
今回は発表の時間の都合上、シナリオの一部のみを流したいと思います。
このシナリオは、最初に、場面設定があります。震災を経験したことのない人が、友人と観光で、震災復興伝承館を訪れた時に、地震に襲われます。また、東松島市役所の方に体験していただいた様子の写真をスライドで流します。それではお聞きください。

VR：
これから、サウンドVRを使用した、津波避難訓練を開始します。これは、災害時に、防災無線や、ラジオ、ナレーションなどから得られる情報を、取捨選択して、あなたが生き延びるための行動を考える訓練です。災害が発生した場合には、情報を、いち早く得ることが、生き延びることにつながります。そのため、ここか

ら得る情報は、とても重要です。正しい判断を心がけて、避難してください。
始めに、訓練の基本となる、場面設定について、お伝えします。あなたは、友人と、東松島市の震災復興伝承館に訪れました。震災復興伝承館に滞在している時に、地震が発生し、それにより発生した津波が、震災復興伝承館に到達する前に、高台がある野蒜駅に、避難していただきます。それでは、開始します。
あなたは、震災復興伝承館の中に居ます。館内は、たくさんの、来館者でにぎわっています。

学生②:
ひと通りの説明が終わった後に、ジェイアラートの緊急地震速報が流れます。
VR
(緊急地震速報。大地震です。大地震です。)
(急いでテーブルの下に移動して、身の安全を確保してください。)
学生②:
次に、地震の詳細を伝えるラジオが流れます。こちらはラジオ石巻のアナウンサーの後藤さんにアナウンスしていただきました。
VR:
地震です。FM石巻のスタジオはかなり揺れています。落ち着いてください。揺れは間もなくおさまります。テーブルや、机の下に潜って、様子を見ましょう。火事が心配です。火を消しましょう。ガスが付いていませんか。ストーブは消しましたか。車を運転中の方にお願いします。念のため、スピードを落としてください。信号が消えていて混乱するようでありましたら、道路の左側に車を止めて、様子を見てください。海の近くに居る人は海岸から離れて、高台に逃げるなど、念のため、津波に注意してください。震源地や震度は、まだ分かっていません。新しい情報が入り次第、お伝えします。ラジオやテレビを切らないでください。こちらは、FM石巻です。
こちらは、FM石巻です。先ほど、東北地方で強い揺れを感じました。情報が入りました。ただいまの地震で、震度7を、宮城県の東松島市で観測しました。震源地は現在、気象庁で調べていますが、震源が海底ですと、津波の恐れがあります。海岸や、川の近くからは離れてください。
情報が入りました。ただいまの地震の震源地は東松島市の東の沖合、70キロメートルです。震源の深さは24キロメートル、地震の規模を示すマグニチュードは、8.4 です。引き続き、余震に十分警戒してください。

学生②:
次に、津波が発生するので、大津波警報とナレーションが流れます。
VR:
大津波警報が発表されました。海岸付近の方は、高台に避難してください。
大津波警報が発令されました。高台にある野蒜駅に、急いで避難してください。

学生②:
お手元の地図をご覧ください。始めに地点Aでハプニングが発生し、最短ルートでの避難をすることができなくなりました。そのため、B地点を経由する方法で避難します。しかし、B地点でもハプニングが発生します。これにより、避難者に改めて避難経路を考えさせます。

VR：
先ほど、大きな地震が発生しました。大津波警報が発令されています。今すぐ、高台に避難してください。また、家屋の倒壊がA地点で発生しています。A地点には絶対に近づかないでください。引き続き、余震には十分な警戒をしてください。大津波警報が発令されています。今すぐ、高台に逃げてください。先ほど、大きな地震が発生しました。大津波警報が発令されています。今すぐ、高台に避難してください、
また、家屋の倒壊がA地点で発生しています。A地点には絶対に近づかないでください。引き続き、余震には十分な警戒をしてください。大津波警報が発令されています。今すぐ、高台に逃げてください。
ただいま、地震による家屋の倒壊が、B地点で発生しています。倒壊した家屋が道路をふさいでいます。大変危険なので、B地点には絶対に近づかないでください。時間になると津波が到達します。
VR：
ただいま、震災復興伝承館付近に津波が到達しました。津波は、家屋や車を飲み込んで、非常に速い速度で押し寄せています。今すぐ、高台に避難してください。
学生②：
私たちは、この研修プログラムを制作するにあたって、被験者に、この研修プログラムで臨場感を持ち、津波が来るイメージをし、問題意識を持ってもらうことで、通常の避難訓練より、いっそう研修効果の高いプログラムにしようと制作してきました。
また、このシナリオのフルバージョンを聞きたい方は、QR コードを読み取っていただければ You Tube にジャンプするので、こちらの方アクセスしてもらえば視聴することできますので、どうぞ視聴をお願いいたします。
次に、私たちは現地研修でサウンドVR津波避難訓練の実証実験を行いました。目的はツールの効果と、課題点の確認、日時は2017年8月30日です。被験者は東松島市役所職員の方4名に体験していただきました。実験後、東松島市の職員の方々にヒアリングしたところ、東日本大震災を思い出すようなリアルな避難訓練だった、企業研究や、各種イベントでも活用できる発展性がある。実際に歩いてみることで、その地域のことを知れ、観光にも役立つなどの意見をいただき、臨場感と発展性を高く評価されました。他にも、発展性のある、さまざまなアドバイスをいただくことができました。
今回の活動を通じて、効果的な津波避難訓練にするために、サウンドVRを使用したツールを開発しました。また、このツールを東松島市役所の職員に体験していただき、臨場感と発展性を高く評価していただきました。
以上で東松島フレンドシップPBL、Aチーム、震災復興伝承館チームの発表を終わりにします。ありがとうございました。

事務長：
Aチームの発表、どうもありがとうございました。先ほどもご説明しましたけれども、このほか定住化促進のための、起業サポートの提案を行ったチーム、東松島の食べる通信の関係性を活かした教育旅行の提案を検証、提案したチーム、この二つのチームがございました。
今の発表については、震災復興伝承館という、先ほども説明した通り、震災風化させないための、現地の施設でございます。
そこでどうやって、訪れた方に、資料展示のみならず、体験してもらおうか、地震の恐ろしさを知ってもらおうかというプログラムの提案をお願いしたいという、東松島市側からのリクエストでございました。サウンドVRシステムを利用して、避難訓練プログラムを開発する提案を、現地で行ってきました。

私の方で、会が始まる前に、東松島市にも、現状について確認しましたところ、それも、発表会に出ていた市民の方からも、実用化に向けて行動すべきではないかというような意見が市役所でも寄せられていると聞いております。
ただ、市役所も、やはりいまだ、震災復興の過程にありまして、職員のマンパワーの不足が、深刻化されていると。財政問題以上に、深刻化されていると。そういうことを踏まえて、提案はありがたいのですがまだ、実用化に向けた、具体的な取り組みができていないというお話がありました。以上で、学生によるプレゼンテーションは終了させていただきたいと思います。

東松島の未来創造

震災から6年がたちました

東日本大震災から6年がたちました。大東文化大学は、宮城県東松島市の復興を応援するために、これまで管弦楽団の「フレンドシップコンサート」、全學應援團による「ひがしまつしま福幸まつり 応援演舞」、「東松島復興応援講演会」などを行ない、2017年1月に東松島市と「地域連携協定」を締結しました。

東松島の人々のたゆまぬ努力によって復興は確実に進んでいます。とはいえ、復興はまだ道半ば。震災の風化も心配される昨今です。

ＰＢＬによる復興応援へ

2016年度から、東松島市と大東文化大学の連携事業としてPBLによる復興応援「東松島の未来創造」がはじまりました。PBLとは【Project Based Learning】の略で「課題解決型の学び」のこと。

山積する東松島市の課題について、学生がグループで学習し、夏休み中には4泊5日のフィールドワークを行い、まとまった成果を東松島市長に提案します。

【昨年度の課題（参考）】

Ⅰ『東松島食べる通信』の市内購読者数の拡大戦略
Ⅱ 東松島市の交流人口拡大方策
Ⅲ 東松島市の新しいコミュニティの形成と課題

募集要項

① 募集人数：15名
学部学科、学年は問いません。申込みが定員を超えた場合は、面接等による選考を行います。

② 経　費：交通費と宿泊費、その他学習に関わる経費は原則として大学で負担しますが、現地研修費の一部として1万5千円程度が必要です。

③ 応募方法：4月中に実施される説明会に必ず参加し、応募用紙を、4月26日（水曜日）午後5時までに、地域連携センター事務室に提出してください。

説明会の日程

第1回	4月 7日（金曜日） 12時40分～13時	東松山キャンパス 5号館 5-0312教室
第2回	4月14日（金曜日） 12時40分～13時	
第3回	4月21日（金曜日） 12時40分～13時	

お問い合わせは、地域連携センターまで。
東松山校舎　管理棟2階（キャリア支援課の隣）
板橋校舎　大東文化会館内

ＰＢＬによる復興応援へ

第二期生募集

第2回FD研究会（東松島PBL）（後半）

第2部は、「東松島フレンドシップPBL」において各チームの指導にあたっていただいた齋藤　博先生、鶴田　佳史先生、飯塚　裕介先生（環境創造学部教員）に、おのおの指導したチームの当時の苦労話やエピソードなど語っていただいた。第1部に引き続き、中野泰彦事務長には司会をお願いした。

飯塚裕介先生：
提案を学生たちにさせるという、そういうプロジェクトだったわけですけども、東松島市から与えられた課題っていうのは結構難しい課題が多かった。私どものAチームの場合には、「震災復興伝承館の活用」というテーマでしたが、実際にはもう少し細かい資料があって、震災復興伝承館で提供する防災教育のプログラムを提案してくれないか、というようなことがあったのですね。8回の事前研修と、あと現地研修の中で、プログラムの提案までするということで、かなりゴールするのがちょっと大変で、ダラダラやっていると最後までたどり着かないだろう、ということが最初に想定されたということでした。
私のチームの指導においては、まずそういうスケジュール感をチームの学生の皆さんと共有をして、それぞれのゴールというか、最終的にプレゼンテーションするところまでにやらなきゃいけないことと、それをどれくらいの時間がかかるかを考えさせて、そして逆算すると、いつまでに、どこまでやっておかなきゃいけないかっていうのを考えさせて、それをやるにはどういうふうに進めたらいいのかを考えさせた。
具体的にはチーム分け、グループ5、6人みんなでやっていたのであれば間に合わないので、担当を決めて進めましょうとかですね。そういうことを、どうしたらうまくいくのかということを考えさせました。
それから、一人リーダーを決めて、そのリーダーに全体の工程管理とか、スケジュールの見直しを常にさせて、かなり厳しいスケジュールの中で全体をうまく、チームを回すためのマネジメントをしてもらいました。こういうプロジェクトを動かして、ゴールを、締め切りに間に合わせるっていうことのスキルを学んでいただくっていうことを意識して行いました。とりあえずそんな感じで。私の進め方としては、そのようなところを工夫しました。

中野泰彦事務長：
齋藤先生、お願いします。

齋藤博先生：
私は、苦い思い出ばっかりでして、あまりうまくいかなかったというのが、正直のところですね。一番迷ったというか悩んだというか、失敗した原因は、地域貢献なのか、PBLなのか、その両立をどう図るのか、というのが非常に難しかったです。
これはPBLがたぶん、ちょっと英語で言うと、エリアベースドPBLなんだと思うのですね。で、地域貢献という方に、私はまちづくりを専門としているので、やっぱりそういうこともあって、そっちに軸足が行ってしまうのです。ですから、ちょっとお二人の、今日は飯塚先生だけでしたけども、鶴田先生と飯塚先生のチームは、そういう意味でいくとPBLということを非常に強く意識されて、課題の設定を明確にされたと思います。
私たちもPBLということよりも、やっぱりPBLを地域でやるっていうことは、PBLのすごくいい舞台になるとは思うのですが、その一方、地域は実験場ではないので、やっぱり何かの貢献をしていかないといけないという思いが強くて、それなりのボリューム感を持ってやってしまったのですね。で、今そのボリューム感っ

ていうのは、お配りしたこの裏表の資料（資料A）なのですが。文献調査から始まって、現地調査、その後の提案骨子を考えて、それを現地調査の中で修正していきました。フルセットをやろうとして、学生がこれについて来られなかったというのが現状です。

【資料A-1】**東松島市ＰＢＬ「Ｂグループ」・今後の進め方**

（6/27）**東松島市の現況に関する情報共有**

6/30　**東松島市の課題と魅力に関する発表**

⇒　課題「若者が都会へと流出し、東松島に帰ってこない理由」

⇒　魅力「若者が東松島に留まり、東松島に帰ってくる動機づけ」

⇒　東松島市での「おしゃれなライフスタイル」「移住者」の事例調査

（＝合宿における現地調査でのヒアリング対象候補）

（7/11）**「おしゃれなライフスタイル」の構成要素と内容**

「おしゃれなライフスタイル」の構成要素

⇒　仕事　／　地場産業（農業、漁業）、…

買物　／　にぎわい、…

食事　／　地産地消、…

住まい／　コミュニティ、…

憩い　／　人が集まる、…

遊び　／　サーフィン、…　など

【参考】雑誌：ソトコト、ターンズ　など

ＨＰ：日本仕事百貨店、しまコトアカデミー　など

「おしゃれなライフスタイル」の表現方法

⇒　コラージュ（写真）、イラスト

ストーリー（ある一日、春夏秋冬、）

映像＋音楽（iMovie）　など

7/14　**自分たちの考える「おしゃれなライフスタイル」発表**

（7/18）**「おしゃれなライフスタイル」調査方法の検討**

⇒　アンケート（ヒアリング）項目　など

（7/25）**「おしゃれなライフスタイル」調査の結果分析**

⇒「おしゃれなライフスタイル」に対する大東生の意見

8/ 3　**「おしゃれなライフスタイル」を実現する仕組みづくり**

⇒　ビジネスプラン・コンテスト

【参考】島根県江津市　ビジネスプラン・コンテスト（参照：てごねっと石見 HP）

8/3 ～ 8/24 **の期間で何回か集まることが必要！（だと思います）**

【資料Ａ-2】

8/24　東松島ビジネスプラン・コンテストの企画

⇒　募集要項

⇒　審査基準

⇒　周知方法　　など

（ここから合宿）

8/28　東松島市めぐり

⇒　土地勘を養う、地域の概要の把握

8/29　東松島ビジネスプラン・コンテストの企画についての意見聴取

⇒　市役所職員

⇒　移住した人

⇒　起業した人

8/30　東松島ビジネスプラン・コンテストの企画の修正、及び、プレゼン準備

8/31　発表！！！

①　大東生が考える東松島での「おしゃれなライフスタイル」

②　「おしゃれなライフスタイル」を実現するビジネスプラン・コンテスト企画

実際、発表の日も、お二人は決められた時間15分くらいでしっかりやられたのですけど、私のところは時間が大幅にオーバーして、なかなかまとまりに欠けていてしまったのですね。でもそれはやはり、何に原因があるのかなと振り返ると、やっぱり地域貢献とPBLを両立させていけなかったからだろうなと思います。やっぱり地域貢献するためには地域の理解とか、地元との関係構築とか、実際に立案して実行して、また検証すると時間と手間がものすごくかかります。しかも継続的にずっとやっていかないといけない。それをこのスケジュールの中でやろうとした私自身が失敗したのかなという意味で反省をすごくしています。
進め方に関しては、飯塚先生の話に少し寄せて、現実的な話をすると、一応この資料（A）の括弧付きのところじゃないかと。6月30日とか、7月14日っていうのはこれ、地連の方で決めていただき、みんなで集まる日なのですね。それ以外の括弧付きは、みんなで昼休みに集まってやろうよという日があったのですね。ですから、エクストラでこれだけやったとしても、たぶんできなかったのは、私の設定の仕方が非常に悪かったっていうことなのですが。

　でも実際、ちょっと繰り返しになりますが、やっぱり地域貢献ということが頭にあると、このくらいのことは最低やらないとうまく提案できないよねっていうのがあったのですね。あとやっぱり学生のこれも、事務長の方からありましたけれども課外授業で、やっぱり学生皆さん、たぶんそうだと思うのですけど、「やる？頑張れる？」って言ったときには「頑張ります」って言いますけど、やっぱりそれが半年間続くかっていうと、「バイトが」とか「試験が」とかって言って、なかなか集まりが悪いのですね。
その中でやっぱり集まって一生懸命やる学生に課題の負担がいってしまって、それ以外の学生はちょっとあまり手が出せないというか、手を出そうとしないとか。その辺のチームを作り上げるってなったら、やっ

ぱり時間と手間がかかる。ゼミなんか、たぶんそうだと思うのですけども、そういうことがやっぱりうまくいかなかったのかなというふうに思っています。
あともう一コだけ、このプログラム、あとでまた第2ラウンド目にもう少し詳しくお話しますが、やっぱりプログラムの構成として、現地調査が最後に来るというのは、特に私にとっては非常に難しくて。地域のイメージもわかない。これは学生にしたらもっとだと思うのですけれども。
やっぱり地域を知って、地域のおじさんとの何気ない会話の中からヒントが出てきているとか、その辺りのことをやっぱり初めにやるともうちょっと進めやすかった。
「あ、あんなことがあったからこれ調べよう」とか「こんな提案をしよう」っていうふうになったのかなというふうに感じました。長くなりましたが、以上です。

事務長：
ありがとうございました。鶴田先生、お願いします。

鶴田先生：
はい。鶴田です。飯塚先生、齋藤先生と重なる部分もあるのですが、やはりスケジュールの問題というのが、当初われわれの中でも課題になりました。
と言いますのは、ある程度スケジュールが立った後、われわれが担当するということになりましたので、やはり現地を最初に見たかった。で、そのことに関してスケジュールが決まっているので、東松島市の方、今日来られている東松山市の方ですが、東松島もよく知られている方。そしてビデオを見せていただくっていう。
あと、地域連携センターの皆さまからの現場の声というかたちでフォローはできましたが、やはりリーダーだけでも見ておいたらよかったのかなと。スケジュールの問題は一つありました。
で、このスケジュールが決定した中で、やはり、これは我々3人が、自分、打ち合わせしていたこともあるのですが、やはり何らかのかたちで残せるものを出したいなということがありました。
で、それは特に私は、よくやりっぱなしで終わっているということで、やっぱりかたちに残さないとならないということで、私の反省も含めて、そういうかたちになっているのですが。もう一つは、やはり大東文化大学、地域連携センターの皆さま含めて、これまで何年もやられてきた中での信頼関係を失うような話になっちゃまずいということで、なんらかの成果をある程度出したいっていう形で、この限られたスケジュールの中やってきました。
で、一つ、やはりこの中では、何か出すためにどうしたらいいかっていうことは、一番はやはりスケジュール管理です。ですから、紙にもありましたが、決められた事前研修以外に、大体われわれが板橋キャンパスにおりますので、東松山キャンパスに来た際は、昼休みとか空いた時間を使って、これプラスアルファで必要なことを言ったり、そういうかたちでやってきました。
で、それ、他のチームも同じだと思います。
で、その中でもう一つやってきた中で、この事前研修の中で他のチームの進行状況が分かりますので、これは実は1回目の事前研修の後、齋藤先生のチームがちゃんと紙で出てきたんですね。紙で出さないと共有できないなと、紙ベースにして、私はそれ以降、われわれのチームとしては、作業をまとめて簡単な議事録のような文書。文書化すると。その文書を多く、自分たちのチームだけではなくて他のチームにも共有できるように配る。
ですから、スケジュール管理の中でちゃんと記録を取って残すということをちょっとイメージしながらやって

いった、というのが大きなものになっています。とりあえずは意識して。

事務長：
はい。ありがとうございました。いま、3人の先生方のお話を聞いていますと、やはりスケジュール管理が非常に難しかったという意見が多く出ていたと思います。これは5泊6日でおこなった実際の現地研修においても同じことが言えて、全体的に通して、難しかったということになりますね。
飯塚先生のところでは、締め切りに間に合わせるため、それぞれの学生に役割を持たせ、またその中でリーダーを設け、そして班を上手くまとめて、研修期間中は対応していたというようなお話だったと思います。
齋藤先生については、やはり地域貢献とPBLとの両立が非常に難しく、どちらに軸足を置いて進めるべきだったかっていうとこに、非常にご苦労はされたというふうに解釈いたしました。鶴田先生に関しては、何らかのかたちで現地に残せるものは、そういったものをいろいろ意識して行っていた、というようなお話を頂戴したかと思います。ここまで3人の先生方の、研修の進め方の方針、またはご苦労なさった点、それぞれお話しいただきましたけれども、次に、担当した班のそれぞれ5名の学生が、例えば、初めて会ったときと、それから研修を終了したときと比較して、どのように学生が変化していったか、成長していったか、そういった点についても、お聞かせいただければと思うのですけれども、いかがでしょう。
飯塚先生からお願いいたします。

飯塚先生：
この授業を取ったからといって、そんなに大きく変わらんかどうかっていうのもありますが、最初はやっぱり皆さん、みんなどの学生も猫をかぶっていておとなしいんですが。
だんだん打ち解けてくるといろんな意見が出てくる一方で、さぼる学生はさぼるようになってくるというのが、変化としてはあったかなと思います。
それからチームワーク、チームでいろんな役割分担をして、ある程度責任を持って作業させたということで。これは、何か一つのプロジェクトをゴールできたと、達成できたっていう、そういう終わった後は学生たちに達成感というか、満足感みたいなものを学生たち感じているようで。
さっき発表してくれた学生たちも、このチームこれで終わりにしたくないというところか、このチームでまた他に何かやってみたいというので、今日はいなかったリーダーですね。アイデアコンペみたいなものに、みんなで取り組んでみたいということを言っていたりするということで、何か一つの体験が一つ自信につながっているようなところはあると思います。

事務長：
はい。ありがとうございます。齋藤先生、いかがでしょうか？

齋藤先生：
難しいですね。やる気のある学生というか、頑張った学生が、変な言い方ですけど、私と会話をしていたりしても、初めのうちは学生としてもちろんですけども、気を使って話をするのですが、やる気のある学生が周りをまとめるのに苦労をして必死こいて頑張っている。
その子と例えば会話をするときには、もう最後の方はあまり学生として気遣う話というよりは、一緒にやって仕事仲間みたいなかたちで会話ができるような。一から十まで言わなくても、「齋藤はこういうことを言おうとしているんだな」とか「齋藤、次こういうふうに言うだろうから、こういうふうにやっておかなきゃいけない

な」と。そういう学生は少なかったのです。5人の内、私が見たところ1人、2人はそういう成長はあったかなと思うのですね。
だから問題はというか、一方途中でうまくのってこれなくて、さぼること、さぼり方を覚えてしまった学生は、最後まであまり変わらずなんですが。
期待としては、発表し終わった後、一番頑張った、さっき発表してくれた女性の友達なのですけども、千田さんっていう日本文学科の女性だったのですが、彼女最後やって、もう感極まって泣いてしまったのですね。
そのときにお世話になった地域の人と抱き合ったりしながら泣いている。その姿を頑張っていなかったやつが見て、お前は泣けるかと。そういうことで悔しいと思ってくれたらいいかなと思うのですけども、頑張っていない学生は頑張っている学生を間近に見るっていう機会だったし、頑張っている学生は頑張る場を見つけられたのかなという感じだと思います。
だからちょっと、どう成長したかという答えにはなっていないですが、そんな場だったかと思います。

鶴田先生：
私のチームは、他のチームと一個特殊なことがありまして。課題を出してくださった方が太田　将司さんという、東松島市の方ではなくて、そこと一緒に仕事をされている、言い方はあれですが一般の方なのですね。
ですから、やはりコミュニケーションをまずどう取るのかということと、現地に行った場合、太田さんがいろいろ現場を見せてくださるので、私が実は現地に行った場合は、ほとんど立ち会わずに太田さんに任せて。それで、学生のリーダーに任せてコミュニケーションを取る。
その代わり、私自身は太田さんと密に連絡を取って、例えば行く前に朝必ず今日の、どういうことをやるかっていう打ち合わせをして、太田さんに「じゃあ何かあれば私は飛んでいきます」っていうかたちにはしていました。大体問題はなかったのですが。
そういうかたちで基本的には現場入って以降は、リーダー含めてチーム全員がちゃんとリーダーと一緒に助け合っていくということと、私が基本的に立ち会わずに、彼ら自身に自主的に、結果的に自分でやるしかないので、回っていくというふうにしました。
やはり私が行かない方が、学生だけの方がやりやすいようで、また私の場合は生産者の方のところに行くことが多かったので、息子、娘、守るようにかわいがってくれるのですね。
私が行くとそうならないので、私と堀越さんで一度立ち会ったのですが、二人離れて、ブルーインパルスが飛んでいるのを見ていましたけども。そういうかたちで立ち会わずにやってきました。
ですから、コミュニケーションというかたちでは、彼らはちょっと変わっていたのかなと思います。
どれだけ変わったかというのはなかなか難しいですけども、大人の人と話すっていう場を自分たちで責任持って仕事を通じてやるということで、その意味では少し変わったかなと思います。そんな感じで。

事務長：
はい、ありがとうございました。
3人の先生方のお話を聞いていると、研修終わった後の達成感、そういったものが学生には見られたということで一致していると思います。そして、チームワークというものもが日を追うごとに徐々に醸成されてきたというお話が聞かれたと思います。
では次に、今回の研修を通じて学生はどんなところに苦労をしていたか、つまづいたり、試行錯誤をして

いるなと感じた点などがございましたらお聞かせください。

飯塚先生：
苦労していた点ですね。私のチームの中で一番悩んで苦労していたのが、リーダーの小林くんという学生が一番悩んでいました。
で、彼は、今回の場合はプログラムを提案してくださいというオーダーがあったので、そのプログラムを、台本を作って、そのシナリオを FM 石巻のアナウンサーの方に読んでいただくとか、いろいろやることがあって。
それから、あと音声ファイルを編集するとか、スライドを作るとかっていう、いろんな仕事があって。
それを決まった期間の中に詰め込んで、外とやりとりするところは地域連携センターの方にいろいろご苦労いただいたところがあるのですが、すぐ明日までにというわけにはいかないので、どれだけ期間がかかるという中で。
飯塚の私には「これで間に合うのか」とつつかれるという中で、やっぱり苦労しながらスケジューリングをしていたというところは苦労していたところ。
それからあとは、今回、先ほど聞いていただいた音声ファイルを作ったのですが、その技術的なところも、さっき発表していた富所君っていう男の子の学生が、あといまいない学生がソフトウェアの使い方とかを、本を借りてきて勉強をして、音声の編集のスキルを身につけると。とかですね。
あるいは、スライドの絵は、先ほど発表していた女性が、平野さんという女子学生が作りましたけれども。あれもなんとか書いたものを直すように私に言われて、書き直しをしていたのですが、なかなかうまく書けなくて苦労をするというような。
役割分担をしているので、そのそれぞれの役割ごとに苦労をしていたところがあったと思います。ちょっとまとまらないですけど。

事務長：
ありがとうございます。

齋藤先生：
私、二点あると思っていまして。一つはこれ、ゼミでもそうなのですけど、やっぱり学生間のコミュニケーションって何でこんなにできないのかと。LINE ですよね、彼らは。LINE の投げっぱなしのコミュニケーションでやっているものだから、お互い無責任になすり付け合う。電話しろよと。会えよと。その辺がやっぱり私の、おじさんですが、感覚の差がすごくあって。彼ら自身も、お互いのコミュニケーションをどう取るかっていうのが非常に苦労していたと思います。
あともう一点は、学生がというよりは私も含めてなんですけど、専門性なのですよね。私は街作りをやっていて、こういうことを普段からやっているし、うちのゼミ生もこういうことをやりたくて入ってきていると。さっき言いましたように、日本文学科の人もいれば、法律学科の人もいれば、経済学部の人もいると。で、やっぱり私が指導しているわけなので、私の専門性と彼女たち、彼らたちが考えている、興味のあるところっていうのは必ずしも合わないのですね。
逆に言うと、教員は教員の専門性を持って地域は切っていける。例えば日本文学の先生だったら、よく分かりませんけど、日本文学を切り口に切っていったら、一緒に日本でやっていた日本文学科の学生、もっと生き生きと楽しくできたのかなと。

だからやっぱり指導する教員、地域はどんな切り口でも切れると思うので、どんな専門の先生でもやれると思いますが、それとのマッチングみたいな話にたぶん相当悩んで。
こっちはもう、「これ分かっているよね？」とか「こういうことは勉強しておかないといけないよね」っていうのが、彼女たち、彼らにとっては初耳だし、なんか、っていう感じ。で、少し戸惑いがあったのかなと。
だから、その辺をもしかしたらチーム編成の中で、専門性だったり本人の興味、一応そういう振り分けは大まかにはしているのですけれども、ちょっとその辺はうまくいかなかったというか、難しかったし、学生たちはやっぱりずいぶん苦労したんじゃないかと思いました。

鶴田先生：
私の場合は、3点ですね。
一つは、やはりこれは食べる通信というもので、これを利用したツアーですね。そもそも食べる通信知らない、私も含めて知らないので、その知識を、そういう知識で、これをやっていく際に提案の中ではマーケティングの手法を使ったような話もありましたので、マーケティングの情報とか、そういうのも他の時間にやって、そういう専門的なことが一つですね。
で、二つ目が、太田さんと現地の中でやりながら、ツアーっていう話がありながら、途中で違う用途が展開をしていく。その変わってきたときに、どう対応していくのか。ただ、最終的にはツアーの提案をしなければいけない。ですから、一つ作業をしながら現場でいろいろ見ながら、話が変わってきつつも、ちゃんと最後はアウトプットを出さなきゃいけないという、調整能力ですね。のところがちょっとリーダーの北村くんですが、北村くんが、結構大変なとこでした。
で、3つ目が、やはり現場に入るからには、いろんな関係者の方への配慮ですね。あと感謝ということで、ちゃんと礼儀正しくやりましょうと。で、最後、最終的にはお礼状っていうのを最終日、夜中までかかって書いていたのですけど。で、一回一回出せないので、ですから、そういう配慮をするときの感謝というのをなかなかやっぱりやり慣れていない。学生なんかはちょっとできなくて、コミュニケーションの問題ですね。そこがあったのかなと思います。以上です。

事務長：
ありがとうございました。ここまでは、この現地研修を中心に、どのような方針で進められていたか。そして、学生指導でどういったところが難しかったか。そして、学生自身がどのような点で苦労したか、指導者の面からみて学生がどのような成長を遂げていったか。こういった学生指導面について主にお聞きしてきました。
ここで一回、フロアの皆さんの方から何かご質問等あればお受けしたいと思うのですが、いかがでしょうか。板橋も何かありましたらおっしゃってください。

田中　博史先生、お願いいたしします。

質問者：田中　博史
はい。スポーツ科学の田中です。よろしくお願いいたします。いろんなことを聞きたいのですけど、一点だけお願いします。
私もいろんなPBL型の形で学生を指導と言いますか、見守るというか、そういうことを多く携わっているのですけども、一番いま困っているのは、どの程度介入したらいいのかっていう点がちょっと困っていまして。

課題が出てきたときに、おれだったらこうするなっていうものがパッと出てきて、ついそれをやらせたくなってしまうのですけど、それだとPBLにならないということで、どの程度先生方が今回学生に介入したかというのを、ちょっと教えていただければなと思います。

飯塚先生：
はい。ご質問ありがとうございます。
私は基本的には学生たちにアイデアを出させましたけども、特にスケジュールを立てたりするときに、「それだと問題あるかもしれないよ」っていうようなことを指摘して、ある程度見通しが立つところに誘導をするっていうことをやりました。
ちょっと完全にほったらかしで眺めているだけだと、自分たちにできないことをやろうとしたと。技術的難しいこととか、スケジュール的に難しいこととか、あるいは解決になっていないようなことを提案するみたいな、いくつかのたくさんアイデアを出させた中にあったので、その中で生徒を現実的なところに誘導するということをやりました。
そういうかたちのということで、介入の程度としてはどうなのでしょうね。それは結構介入している方になるのかと思いますが、そういうかたちで介入を行いました。
それは今回のプロジェクトのスケジュール的な問題もあってということだと思いますが、私の場合、そのように行いました。

齋藤先生：
私は、あまり介入したくないと。学級観戦です。で、まず何をやりたいのかを議論をさせて、こんなことをやりたいって少し意見が出てきたら、それをまとめるお手伝いをする。まとめた上で、参照文献とか参考になる文献は、材料だけ出すのですね。分からないながらも自分で料理してみなと。具体的なものが出てきたら、また具体的なものに対して「ここが良くないじゃないか」とか、「ここはもうちょっとこうした方がいいのでは」。で、「材料足りないならこんな材料もあるよ」。ですから、やりたいことをまず出させる。実際に自分で料理も作らせる。だから時間がかかってしまったりしたというような感じですね。

鶴田先生：
私のチームに関しては、二つにちょっと分けていまして。最終的なプレゼンテーションを出すまでの作業に関して言うと、その後の話なのですが。
作業に関しては、基本的にそれを達成するのに必要であろう情報で、関しての徹しようと思ってやっていました。
例えば、現地の状況が分からないので、私は地域連携センターさんのところに行って、現地に、週末に一回で、太田さんとコミュニケーションを取ったりして、あとはマーケティング必要だって部分をやって、ほんとは基本的には放任主義でいたいのですけど。結局、それで私、介入しました。で、やはり途中の段階で、いまこれができていないとまずいでしょっていうような、最終的には介入してしまったっていうことがあります。で、それ以外の作業の終わりに関しては、ちょっとこれ、配布資料のレポートについてっていうのをお配りしたのですが、それはそれとして、PBLとしての成果、何らかせっかくまとめたので、振り返りレポートというか、報告書を書いてもらおうかなと。
で、あわよくば、「食べる通信」に載せてもらえないかなと。こういうのを起点に作って、これは介入というか、アウトプットを出すというかたちで、ただレイアウトとか、写真とか全部任せていたので、こんな感じでいま

出てきていますが、ですからやはり、結果的にスケジュールの関係でどうしても介入せざるをえなかった、ということが結果としてあります。

質問者：
ありがとうございました。参考になりました。

事務長：
今回の東松島のフレンドシップPBLは、先ほどから申し上げています通り、社会連携、社会貢献活動の色合いも大変濃いものでございました。そういった中で先生方も軸足をどこに置くかというところで、大きなご苦労があったと思っております。また、このPBLというものは、皆さんもご存じの通り、本学のアクティブラーニングの一役を担う側面もある取り組みでございます。今後の、このアクティブラーニング発展のために、今回のPBLの活動の礎ともみなしまして、率直な感想やご意見など、最後のまとめと致しまして、先生方お一人ずつ、お言葉を頂戴できればと思いますが、お願いできますか？

飯塚先生：
二点ありますけども、一点目は、私、PBL型の授業とか、あるいはゼミ活動でも他でも行っているのですが、やっぱりPBLの場合は課題解決の、解決策を提案できてなんぼというか、取り組むことに意義があるというよりは、やっぱり最終的に求められている課題に対して何か、それが本当に役立つかどうか、何らかの提案をさせるところまでやることが、やっぱりPBLの授業で大事なことで。中途半端に終わってしまうと学生の満足感というか、達成感がなかなか得られないのではないかというところがあって。
そういう意味で、今回のスケジュール、なかなか厳しい、時間の問題というのもありますが、先ほどからありましたが、現地研修が最後にある中で提案をするということですね。
現地の課題を提案するのに最後に現地を見るっていうことが、なかなかスケジュールを立てる上でも難しかったということになります。
そういう意味では、スケジュールの問題と、それから教員側としてはいかに学生たちをゴールまでたどり着かせるかっていうことが、学生の満足度というか、与える上で重要だと考えています。
それから今回のプロジェクトは、先ほどご説明の中でありましたが、多数の応募者の中から選抜された、やる気のある15名だけを対象に行ってきたということで。
それでもさぼる人が出てきたりしたのですが、このようなものを一般の授業でやると、やっぱりなかなかうまくいかない部分がどうしても出てくるだろうということが予想されます。
それは、やはり悩み深い問題で、私も授業で、チームワークのプロジェクトベースをやっても、4人チームの中の1人だけがほとんどの作業をして、あとの人はただ乗りみたいなことがどうしても起きてきてしまって、それはやっぱり解決策を私、持っていないのですが、他の授業でのアクティブラーニングに取り入れる際には、その辺のフリーライドと言いますか、この問題はやっぱり課題として残るかなと思っています。
齋藤先生：
最初にお話した話と一緒になるかもしれませんが、さっきエリアベースドPBLについて少し批判的な言い方をしました。地域貢献に軸足を置くのかどうかと。しかしながら、私はあまり、批判的に言ったのですが、実際はそこにすごく可能性があるというか、思っています。
しかしながら、地域貢献とPBLを両立させるためには地域への理解、あと地域の人との人間関係の構築。あとは実際に実行して継続するということが必要だと思うんですね。

そのためには、やっぱりコストがかかります。時間もお金も手間もかかりますね。ですから、そのコストをなるべく下げる、意識的に下げる工夫が必要なのかなと。
例えば今、私もゼミでいろいろやっているのですが、今はお隣、板橋区の研究室をやっています。お隣の練馬区でやっていますね。
やっぱりそうなると、私も週一回くらい用がなくても行って顔を見ているとか。で、学生たちもあまり交通費がかからない。土地勘があるとか。そういうことで継続してもう3年から5年くらいやっているのですけれども、やっと実行に移せる段階になってきたかな、という感じなのですね。
あと今、場所の問題ももちろんあるのですが、特に私がそれを、ゼミの活動で一番大事だと思っているのは、やっぱり一緒に汗をかくパートナーがいるかどうかなんですね、地域に。そういう人を見つけて、つまりその人と一緒になって怒ってくれるとか、一緒になって指導をしてくれると。そうなると本当に、本当の意味での社会勉強みたいなこともこういうふうに近づいていったり、就活に使えるようなコミュニケーション能力がついたりとかするのかなと。ひるがえって東松島、やっぱり遠いですね。しかしながら、もういま、たぶん地域連携センターさんが長い間お付き合いされてきて、人間関係がもうずいぶんできてきているとか、地域の理解もやっぱりある程度深まっているから、それをまたうまく共有できるような仕組みを作るとか。
あとは実行する上であんまりエネルギーがかからない実行の仕方、例えばコンサートであったりとか、お相撲とか、そういうのは本当に非常に上手な地域貢献の仕方。それはPBLではないかもしれませんが、そういうこともやっぱりずいぶん蓄積されてきていると思いますので、それ以外のコストをどう下げていくのかというのをちょっと意識的にやっていくといいのかなと。じゃ、具体的に何をするのかというのは、ちょっと私もいまアイデアはないのですが。
あともう一個、このプロジェクトのいいところは、きっと、そのコストの多くの部分を地域連携センターならびに大学が負担をしてくれています。構築された人間関係をご紹介いただいたりとか、移動の手間を省いていただいたり。そういう意味で言うと、教員からすれば、この授業にのっかっていって、地域貢献プラスPBLを実現しようという意味ではいい機会なのかなと思います。
で、まるまる全部いいって言っているわけでもなくて、もちろん今日ずっとお話した内容の課題はあると思うんですけども、そういうことだったのかなというふうに感じました。以上です。

鶴田先生：
飯塚先生、齋藤先生と重なる部分というのは、同じようなことも考えています。
やはり準備、ここまでやる、やらせていただく側としては、準備をされて現場入ることってないのですよね。大体。そういう意味では、こういうこと取り組みたいっていう先生方は、ぜひ参加されるといいのではないかなと思います。
それとは別の三つ、実はありまして。一つはPBLというかたちですので、できれば課題がある程度早めに分かった場合には、それを解決するために必要なスキルがあるとするならば、それが共通の例えばコミュニケーションとかリーダーシップなのか、あとは個々のマーケティングのものなのか。チームごとに変わってくると思いますが、ある程度必要なスキルを身につける事前学習があるといいのかなと。
二つ目が、経験者はやっぱり強いですよね。ですから、例えば今年参加した学生がリーダーとして参加するのか、サポーターとして参加できるのか分かりませんが、やはり現場を知っている学生が継続的に入るというシステムがあると、現場との継続性とか、あと現地に最初に入らなくても情報が入るっていう意味ではいいのかなと思います。
三つ目が、これは私自身が良かったことなのですが、3人同じ学部ですけども、この2人の専門近いです

が、私、違うですよね。
で、業務は一緒にやりますけども、一緒にじゃあ、それぞれの手法を独自の自分の手法で、それぞれ進めている現場を見たことがあるかっていうと無かったので、そういう意味では、あ、こういう、結構私、実はお二人の、文書化するのだったらスケジュールをうまくやるのだって反省しながら直した部分もありまして。ということで、自分自身のPBLかどうか分かりませんが、進め方の改善に実はなっています。で、どっちかというと余談ばっかりで申し訳なかったのですが、そういう意味ではFDとしての特でもあったのかなというのは思います。以上です。

事務長：
はい、ありがとうございました。
以上をもちまして終了したいと思いますが、フロアの皆様から最後もう一度、何かお聞きになりたいこととかございましたら、どうぞ。
よろしいでしょうか。
3人の先生方、ありがとうございました。先ほどコストというお話が出ましたけれども、本事業経費は140万円を要しておりますが、来年も引き続き実施できればいいな、というふうに個人的には思っております。
長時間にわたり、皆さまありがとうございました。それでは、学務課の方にお返しいたします。

学務課：
どうも先生方、ありがとうございました。
今日のこの会を、要するに全学FD委員会では、地域連携センターの中村所長をはじめ、中野事務長、飯田さん、堀越さんには半分正直無理に、ぜひ会をやってほしいということで、多忙な業務の中、傍ら、今日もいろいろな資料を作っていただき、委員会としてはもう少し活気のあるところでやっていければよかったかなと思いました。
本当にお忙しい中ですが、今日このような実りある機会を作っていただきまして、地域連携センターの他の方に今一度、もう一度拍手の方をよろしくお願いいたします。
ありがとうございました。板橋もありがとうございました。
では最後になりますが、高橋学務局長閉会のお言葉をお願いしたいと思います。

高橋学務局長：
本FDの研究会を開く準備もやってくれまして、先生方、職員の方、本当にありがとうございました。私自身、非常に感じたことは、先生方ご苦労の中で、先生方が課題解決に向けての、ルーブリックというものと、それから学生側の創造する、というのですかね。学生が実際的に想起するルーブリックに、かなり差異が出てきてしまうのだと。
それをどう埋めるか。介入して埋めるのか、それとも学生の気付きを待つのかっていう、そういうせめぎ合いが、いずれにしてもPBLの場合にはかなり課題ではないかというふうに、あらためて痛感をさせていただきました。
本当に、この限られた中で先生方が、ただ学生をしっかりと支援されて見守られてですね、素晴らしい成果が上がったのではないか、ということも実は実感をしております。本当に敬服をしてございます。私自身も、自己の教育活動に今日の研修会の様々な要素を、学んだことを活かしていきたいというふうに思います。

また、3人の先生方、それぞれご専門で、あるいは専門も含めて、このPBLを展開されているかと思いますけれども、さらに研鑽をしていただきまして、どうか学生のために、また本学のために、ご教授を頂けるような機会を、お願いをしたいというふうに思っております。本当にありがとうございました。

学務課：
髙橋学務局長、ありがとうございました。時間遅くなりましたが、第2回全学FD研究会、東松山フレンドシップPBL事例報告会を、これにて終了させていただきたいと思います。
本日は皆さん、ご出席いただきましてありがとうございました。